

て學に篤く、人に接して城府を設けず、斯道の事に論及せば其の莊重なる辯舌を吝まず、蠶兒の糸を吐くが如くに淳々として調くる處を知らず、論じ去り語り來り、親切に、懇篤に、注入的に、充分咀嚼せしめなば止まざるの風あり、之を以て事の質疑を要するものあらば地方の杏林必らず君を迎ふて其の高説を聞き、又行いて其の高論に接するものもありと云ふ、蓋し地方杏林界の重要厚きに依るや勿論なり、君又社交に巧みにして談笑克く人に接し、殊に友誼に厚く、温良端直の資は毎に友人間の好評を博して尊敬を拂はれつゝあり。



齒科醫士 木平爲次郎君

奈良市東向北町貳番地

齒科を以て關西屈指の人を需むる、蓋し其良材に乏しからざるは素よりなるも、其の良材の人格學術技能併せ得て完全せるは是れ又甚だ稀れなるべし、吾人斯の木平君に接して初めて快哉を禁せざるものありて存せり、其の人格の高潔にして超然たる、其の學術の遠深にして甚大なる、其の技能の超脱して嶄新なる、方さに是れ關西の良材と云ふと云へども過言にはあらずるべし、君は奈良縣宇陀郡神戶村醫師松井祐安氏の三男也、出でて木平氏を繼ぐ、明治二年一月の出生なり、明治廿六年笈を負ふて東京に遊學し、高山紀齋氏の門に入る、蓋し其の目的齒科醫たらんとするにありき

百折不撓克く勵み克く勉め、研究勤學年あり遂に其の目的を達して齒科醫術の蘊奥を極め、明治八年三重縣名張町に開業地方の重望を負ひしが、明治三十年來りて奈良に住し、次で三重縣上野町に出張所を設置し、廣く患者の治療に従事せしか本邸の多忙は到底出張所の經營を爲すに遑あらしめず、止むなく四十年其の出張所は閉鎖し、専ら本院の經營に當る、先づ四十二年現下の地を相し、此處に理想の家屋を建築し、治療室を始め其他器械に及びて文明新進の模範的齒科療院を造る、聲名愈々高く四隣に響き、來り診を請ふもの門前市を爲す關西の霸王の聲傳はる、君が長兄松井良知氏又醫を以て奈良に在り、而して聲名亦君と相比して譲らず、兄弟一地に醫を以て名を等ふす何ぞ夫れ幸福なるや、君資性温健忠實にして臨床家を以て世に許さる、君が特意は技工學に在りて之れ亦斯界の重鎮たるに背かず想ふに日進月歩の學術に併進して其の速度を與にし、患者をして其の苦患より救濟するは醫者として切實に感受する處なるも、多くの場合多の人は實に苟且に對して儉安に流れ、一度杏林の人となるや昔日の學窓の意志

を忘失し、唯徒らに名聞を逐ひ利殖是れ力め、所謂醫商なるもの、徒と化するは慨嘆の至りにして、大にしては學術の眞摯を汚し少にしては自己を詐き、其劣醜實に面嘆に値すべきものあり、而して君此の情弊を打破せんとし、身を以て衆に先ち、奮闘邁進の英氣を鼓するは、吾人又國家の爲めに欣賀の念を禁じ得ざるなり。



齒科醫士

森田駒次郎君

京都府齒科醫師會長

京都市上京區東洞院三條北

君の半生の歷程を數ふるもの誰れか其の多難多折なるに驚かざるものあらんや、想ふに君は奮闘克く戦ひ激勵克く調したる後、最後の勝利を得たる將軍とも云ふべきなり、明治元年京都の新屋敷に呱呱の聲を擧ぐるや、幕府の悲境に接して京都は志士往來の街となり、血雨凄として山河爲めに暗きの時なり、君此の内に生る帶刀權門の功も見らるべき筈なきなり、時勢の浮沈と共に放浪し、艱難具さに背め盡し九歳にして漸く就くを得たり、勤勉克く勵み中學校に入りしも、獨逸學校に轉するに及醫學に志し、後轉じて東京に遊學し専念齒科醫學を修學す、琢磨研究すること五年にして京

都に於て齒科醫術開業試験に應じ及第す、而して其の月桂冠を得る迄に君が踏み來りし難苦の歴史は實に立志傳中の人として傳ふべきものあり、卒業後直ちに京都に開業して今日に至る、君開業以來聲名廣く家門榮々京都府齒科醫師會の副會長に推され、會長渡邊晋三氏の没後君衆望を負ひ選ばれて會長となるに至れり、君資性沈毅にして寡言、殊に事物に拘泥せず放膽豪壯の氣に富む、されども家庭の圓滿と長者に對する禮を失はず、長幼序を乱すを許さず、之を以て一種の威嚴を備へ會者をして畏敬の念を起さしむ、君は長者に對する禮を乱すを以て一の暴惡と爲し、自ら之を嚴守すると共に又他面に向ふて之れが乱暴を惡むこと甚だし又以て美点と云ふべきなり、君専門以外弘く内外の宗教に興味を持し熱心之れが研究に従事せり、之れ己を去つて永住の目的を定め、人世に處するに最大にして且つ善良なる義務を遂行せんことを樂むものにして、方今無宗教を口にして恬然愧ぢざるの輩をして君が爪垢を併めしめたきなり、君には一種信念あり、即ち斯る意氣に依りて「今日」を尊捧して、今日に活動し、今日に奮闘し、

今日に斯の信念を聯續せり、故に眼中常に名譽も權門も毀譽も褒貶も之が  
跳梁を許さず、凡ての場合に於て超脱して學術の爲めに其信念を捧げんと  
す、欣羨茲に至りて極まれりと云ふべし、嘗つて巷者人あり君を評して砂  
礫中の金なりと、吾人其の言の欺かざるを喜ぶ、君既に知己あり、増々其  
の信念を持して堅實に、愈々健在ならんことを偏へに祈る。



醫學士 吉田 彦 一 君

和歌山市海北町一丁目

君の和歌山に開業するや時人傳へて曰く、人世を呪ふ冥闇の惡魔之れよ  
り除破せらるべし、神は我等和歌縣人を救濟して回春の快を附與せしむべ  
く斯の人を下せりと、蓋し是れ至言と云ふべきなり、君の風貌に接し其の温  
乎たる寛容を仰ぐに於て既に懐ひ半ばに過ぐるものわらん、而して更らに  
其の治療を受くるに於て斯の言の強ちに誇大に失せざるを知らん、和歌山  
縣の地豈に夫れ多福なりと云つべし、君は和歌山縣西牟婁郡大都河の人、  
家代々地方の名門を以て許さる、和歌山縣政界の傑物出谷英一氏は君が外  
舅たるなり、君明治卅三年三月和歌山縣中學校を卒業し、同年直ちに第四

高等學校に入り、超へて三十四年七月同校を卒業、同年九月京都大學醫科大學に入りたるが、君は在學中常に優等の成績を以て先輩同僚に畏敬せられ、三十八年十二月同大學を卒業し、次で同大學附屬病院内科に入りて助手として令名を馳す、専攻是れ努めて倦まざること四年、其の蘊奥を極むるに至り四十一年九月郷に歸り、現下の地に初めて業を開く、君の業を開くや遠近其名を聞いて患者集來し、同業者間未だ會て有らざる盛況を呈し、見るもの聞くもの其の殷盛に喫驚せざるなし、君資性快活にして而かも謙讓の美德内に溢れ、同業者君を推して自から下る、高風欽すべきにあらずや、其の徳望の高き關西稀れに見る處なり、君患者に接する極めて懇篤にして、一度君に會したるもの永く其の厚義を忘れざらむ、君内科を専門として聲望あり、一度匙を取れば宛然神助の感あらしめ、其の靈腕殆んと神に近し、君又後進の子弟に厚く來りて説を請ふあれば、淳々として語りて倦まず、其の造詣の深遠にして廣大なる聽者をして覺わす襟を正さしむるものあり、殊に常に斯界啓發の爲めに實驗に依りて研究收め得たる治

療上の新意見を發表し、地方に於ける斯界に貢獻しつゝあるは何人も君が襟度の寛潤なるに敬服せざるなく、内にしては福徳圓滿の主人公たり、外にしては地方斯界のオーソリチーたり、紀州の地夫れ又好師範を得たりと云ふべし。



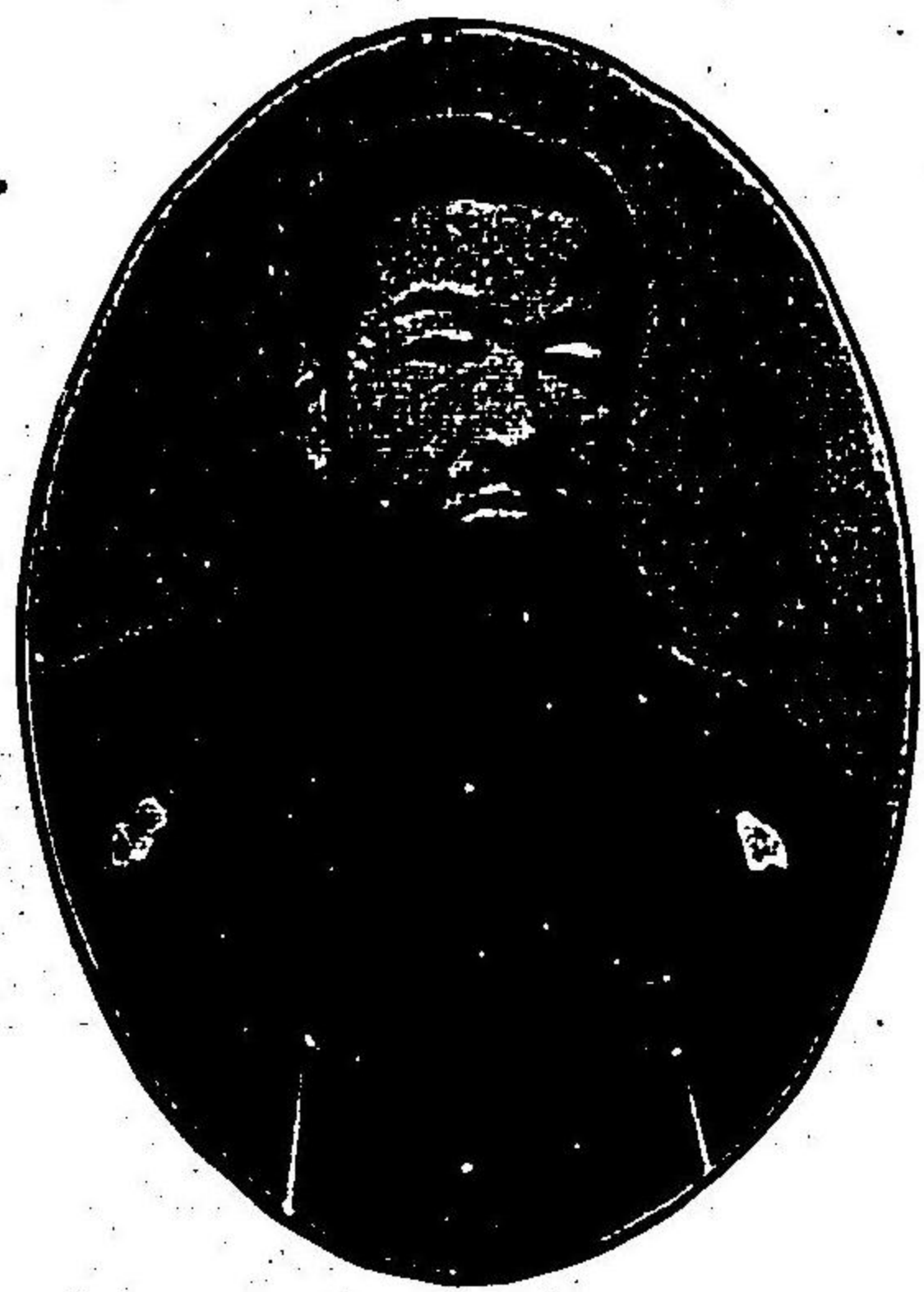
齒科醫士 藤田藤次郎君

和歌山市卜牛町

和歌山縣の人、舊和歌山藩士たり、明治五年一月を以て其藩邸に産る幼にして和歌山小學校に學び超へて和歌山縣立中學校を卒へ、明治二十三年十九才にて實業界に雄飛せんと欲し、山陽鐵道株式會社に入りて其事務員となる君夙に實業界に志を就さんと決し、殊に我國は將來清國に向て一大發展の余地あるを觀容し、南清方面に君が翼さを延さんと心潜に期する處あり南清漫遊を企て、且つ大に圖る處ありて、其前提として、君は人心の收斂の法として醫術特に齒科醫術を研鑽するの必要なることを認識し、明治二十六年東京に出で、東京齒科醫學院高山記齋氏に師事して口腔齒科學

一般を修得して、明治二十八年京都市に歸りて内務省檢定試験に及第して齒科醫士の免狀を下付せられ、神戸及臺灣に門戸を開きて大に地方の患者を治療したるに、時恰も明治三十七年は君の宿志を達すべき秋は來りぬ、齒科以外の希望有して、南清に渡航し、廣東、福州、漢口、長沙、に歴遊し齒科の開業しつゝ一面に於て、君の理想たる實業方面に飛雄を試みたるも不幸にして當時戰役の余波として世間の不景況の聲は絶えず空しく君が多年の宿志を果す能はず、事志を違ひ終に四十三年夏再び和歌山市に歸り齒科の門戸を張るに至れり。

君嚴正なる紳士なり、溫良篤實にして多く人と争はず、頗る老成の風あり、人に接して溝渠を設けず善く語り善く談ず、君は亦觀世派謠曲の奧義に達す。



湊内科院々長

醫師 湊 謙一君

兵庫縣明石町ノ内相生町

嘉永二年九月、大分縣宇佐郡長洲に生る、本姓は南氏、南尙翁の甥也、幼にして其叔父に當る豊後國東國東郡宇田深なる醫家山下氏の嗣子となり、乃はち其姓を冒す、長するに及んで同國日の出の碩學帆足萬里先生の高弟米良東橋氏の門に入り、専ら漢籍を修む、年十八、藩醫宇都宮謙齋氏に就て、初めて醫學を修む。

明治五年笈を負ふて大阪に來り、當時杏林の大家エルメレンス氏に従て内科を專修し居ること數年、去つて神戸に移り、當時神戸病院長たりし山田俊卿氏に就て内科學研究の傍ら、兵庫縣の備醫ベレー氏指導の下に同科

の實地練習を積めり、明治七年始めて播州明石町の内細工町に門戸を張りたるも、尙ほ小成に安んぜず、依然舊師ベレー氏に就き、實地のクリニックスを聴き、孜孜として只管斯道の研鑽を怠らず、後ドクトル、テーラー氏の來朝を期とし、之に師事して外科をも併せて研究せり。

後君は山下氏の後嗣を親戚某に譲り、明石舊藩士湊氏の後を襲ふ事となり、乃はち現姓を冒すに至れり。

四十二年八月現住所に移轉したるが、名聲舊に倍して門戸般賑を極め、以て今日に至れり君が今日までの經歷に於て、最も著しき功績を舉れば、先づ指を神液の發見に屈すべし、君は之が爲めに一面名聲を揚げたりと雖、他の一面に於ては多少の物議を招きたり、大偽醫者、大山師の惡罵は一時君の身邊に迫れり、然れども今日より見れば此惡罵こそ所謂高木風に憎まるゝの類にして、親しく君に接して其謹厚熱實、利害の外に立ちて世の爲めに盡す底の人物なるを知る者は、却て惡罵を爲すものゝ不徳を鳴しつゝあり、神液の功驗に至りては世既に定論あり、敢て努々を要せず。



醫學得業士

安城 智眼君

大阪府中河内郡枯木

君は明治十年の出生にして、其家世々浮屠氏の亞流を汲ひ、君普通教育を大阪市堂島中學校に受け同校卒業後大阪高等醫學校に入り、始めて刀圭學の階梯を踏みたり。

後一家の事情に依りたるか、或は自から感ずるところありたるか、中途にして大阪高等醫學校を退き、京都醫學專門學校に入れり。

明治三十八年京都醫學專門學校を卒業し、直に現在の場所に開業、以て今日に至れり。

君は沈着にして寡言、而も社交の術に長じ、亦以て醫界に於ける當代の

流行兒たるを失はず、殊に其温良恭謙にして敢て人に驕らず、弱者に對して頗る同情の念に富める点は、醫家として通有的に之なかるべからざる美德を備ふるものと謂ふべし。

開業後漸く六年の星霜を閲せるに過ぎざるも、其醫術の研究に忠實なること、患者に對して懇篤周密なること、は、漸時門戸の繁榮を來し、其勢力動もすれば先輩を凌ぐに足るものあり、君尙ほ春秋に富む、吾人は謹んで前途の祝福を祈るもの也。





私立南川病院長

南川 淳一君

兵庫縣川邊郡  
立花村ノ内塚口村

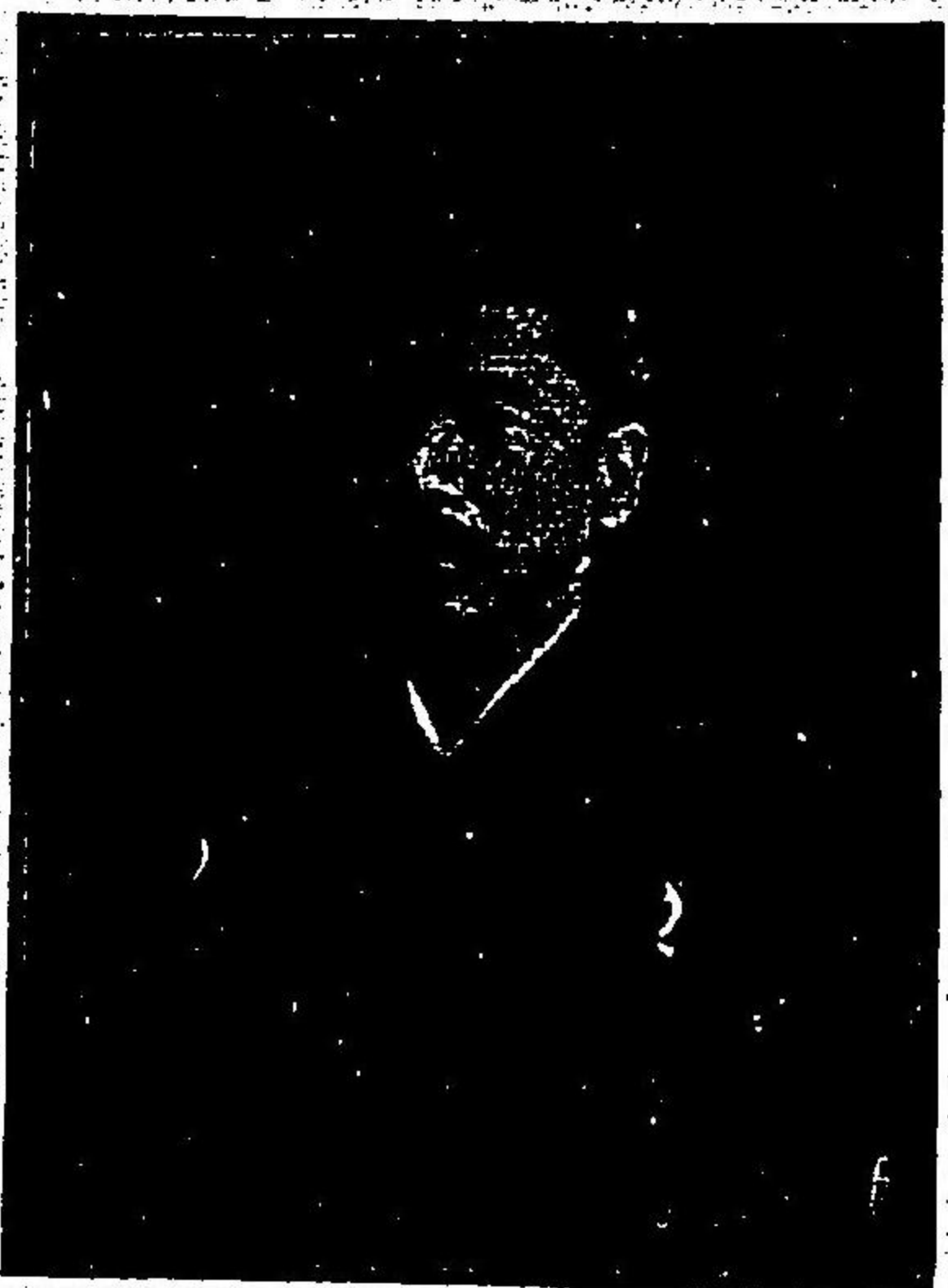
安政四年六月を以て和歌山縣西牟婁郡田邊町竹中家に生る、幼にして漢學を修め、明治八年十二月和歌山縣立病院に入り、同十一年二月に至り殆んど全科の學理を修得す、次で大阪府立病院長高橋正純氏に従ひ、専ばら産科の實習を爲す。

明治十六年兵庫縣に於て醫術開業試験に及第、同十七年より同縣川邊郡立花村乃はち現在の場所に開業、傍ら同郡産婆講習會教師の囑托を受け今日に至る、二十年大阪府下西成郡産婆講習會教師の囑托をも受けたるも、約二ヶ年の後規則改正の爲め自然消滅す、同四十一年川邊郡々立産婆養成

所を君の經營に拘る南川病院内に設立し、爾後毎年十名乃至二十名の産婆を養成しつゝあり、現に君の養成したる産婆にして内務省の免許を受有せるもの四十名に及び、其多數は産婆を開業し居れり。

君は開業後既に二十有七年の久しきに亘り、引續き現在の場所に於て産科婦人科専門の診療に従事し來れるを以て、技能熟達して名聲附近に噴々たり、専門以外の方面に於ても名望夙に揚り、現に立花村々會議員として自治の爲めに貢献するところ尠からず、性剛直にして嚴正、事に當て苟くも所信を曲げず、敢て雄辯家と言ふにあらざるも、至誠人を動かす、侃々として事理を説く底の談論は、能く對手をして心服せしむるに足る、故を以て勢力郷黨間に冠絶せり。

君の原籍は大阪府下豊能郡小曾根村にあり、嗜好趣味は圍碁並に書畫等なり。



## 長谷川桂山君

大阪府泉南郡  
南近義村大字楠本

安政三年の出生、君の家は中祖長谷川星聞氏以來、十代に亘りて小兒科専門醫を業とし、舊岸和田藩の給人格に列す、就中疝の治療は君が家の獨特的なりしより、世人呼んで疝醫と稱するに至れり、今尙ほ疝醫の名は南海鐵道沿線の一名物として、遠近に噴々たり。

君は先代桂山氏より漢法を學び、又舊岸和田藩醫加藤友元氏に就て洋法を修む、明治八年六月堺縣醫學校に入り、始めて組織的に新式の醫學を修得す、卒業後今日に至るまで、父祖の業を繼ひて専ら小兒科の診療に従ふ、現に其技能と徳望に集まる患者甚だ多く、君は老軀を提げて一々之に接し

苟くも倦まず。

君は上述の如く世々地方の名門なりし事と、抄からざる資産を有する事と、而して其温良なる紳士なる事とに依て、大に名望を集めつゝあり、娛樂趣味としては、業務の餘暇、刀劍、書畫、骨董の類を弄ぶ事にあり、其れ以外何等の道樂なく、實に謹厚篤實の君子人なり。



醫師 武井崎太郎君

大阪府泉南郡佐野村

武井君は泉州の人なり、其先は織田信長の待醫武井夕庵氏に出で家系正しき名門の末裔たり慶長年間夕庵氏の孫來つて、和泉國中莊の里に住み、醫を以て業となし、幽齋と號し名聲大に其遠近に馳たりと傳へらる、夫より累世醫を以て業となすに至る而して累代名醫輩出せり、特に君の祖父松庵氏の如きは百年以前より夙に蘭學に通曉し、最も人身窮理學の如き氏の長所にてありし、又文學の造詣深く詩文を善くしたりと云ふ、當時既に實地解剖を練磨して、人身の構造を明かにし益々其研究に従事したるに惜ひべし齡四十九歳にして、文化壬申四月逝けりと云ふ、生前著述頗る多く、

就中、解体新書、或は蘭學の辭書等今尙君の家に存す其解剖圖の如き精巧を極め居れり。

君は文久元年三月を以て生れ、幼時漢籍を家庭に學び、明治十三年堺縣醫學校を卒業し、實地研學の目的を以て大阪に出で、大阪病院に入り吉田顯三氏に師事す、奈良市に其分院を開くや君は撰ばれて其分院詰醫員となる、十八年家祖の業を今の佐野村に襲ぐ、君は名聲隆々遠近に敬慕せらる、其専門とするところは内科にありて其技能大に凡を抜くものあり、人と爲り謹嚴卒直、君子人の風あり、患者に接するや、懇篤至らざるなく老幼子兒をして尙ほ克く信服せしむるものありと云ふ。



備前縣三等軍醫  
正八位勳六等

伊賀政雄君

大阪市東區島町一丁目

明治十七年三月を以て岐阜縣海津郡高須町に生る、君の家は世々高瀬の藩松平家勘定奉行なりしが、維新後家道振はず、此間に處して君は學に志すこと甚だ切なりしも、學資の供給意の如くならざりしより、君は終に意を決して生家を脱し、前途遠遠なる苦學の第一着歩に就く、時に年僅に十三なり、君は此郷黨を驚嘆せしむるに足るべき大膽の奮發を光榮ある經歷の第一頁として、刻苦經營具さに螢雪の功を積み、何人の補助をも受けず何人の資陰にも倚らず、獨立獨行、終に能く今日の地位を胤ち得たり。初め私立關西醫學院に學び、卒業後暫らく大學撰科にあり、年十九にし

て醫師開業免狀を得、翌年召されて軍醫に任せられ、軍に滿洲の野に従つて轉戦七八回に及ぶ、乃はち其功に依りて正八位に叙し勳六等旭日章を授けらる、三十九年八月現在の場所に開業、専ら内科、小兒科の診療に従事す。

意志の堅實なることは、其苦學幾星霜、動もすれば邪路に踏み入り易き青年時代を無事經過し、終に功績を收め得たる事實に徴するも以て想察し得べく、君は此間に於て能く精神を鍛煉し、緻密の頭腦と事に當つて處決流るゝが如き決斷力とを養成し、少壯醫家として稀に見るところの圓熟せる苦勞人たる素質を造り得たり。

君は一面に於て斯の如く堅忍不拔能く奮闘に堪ゆる戰士なる而已ならず他の一面に於ては綽々として専門以外の趣味を味ふ餘裕を有す、其嗜好を能樂に馳せつゝあるが如き、亦以て其一例と爲すに足るべし、百難と闘つて成功を收めたる醫家としては年齒甚だ少壯、今後尙ほ從來の如き意志を以て進めば、前途夫れ利目に値するものあらん哉。



醫學得業士

長谷川謙一郎君

和歌山市元寺町南ノ丁

明治十年三月大阪府に生る、泉南郡南近義村大字橋本、長谷川桂山氏の長男なり、三十六年十月大阪府立高等醫學校を卒業、三十七年三月同校助手兼醫學校病院内科勤務を命せらる。

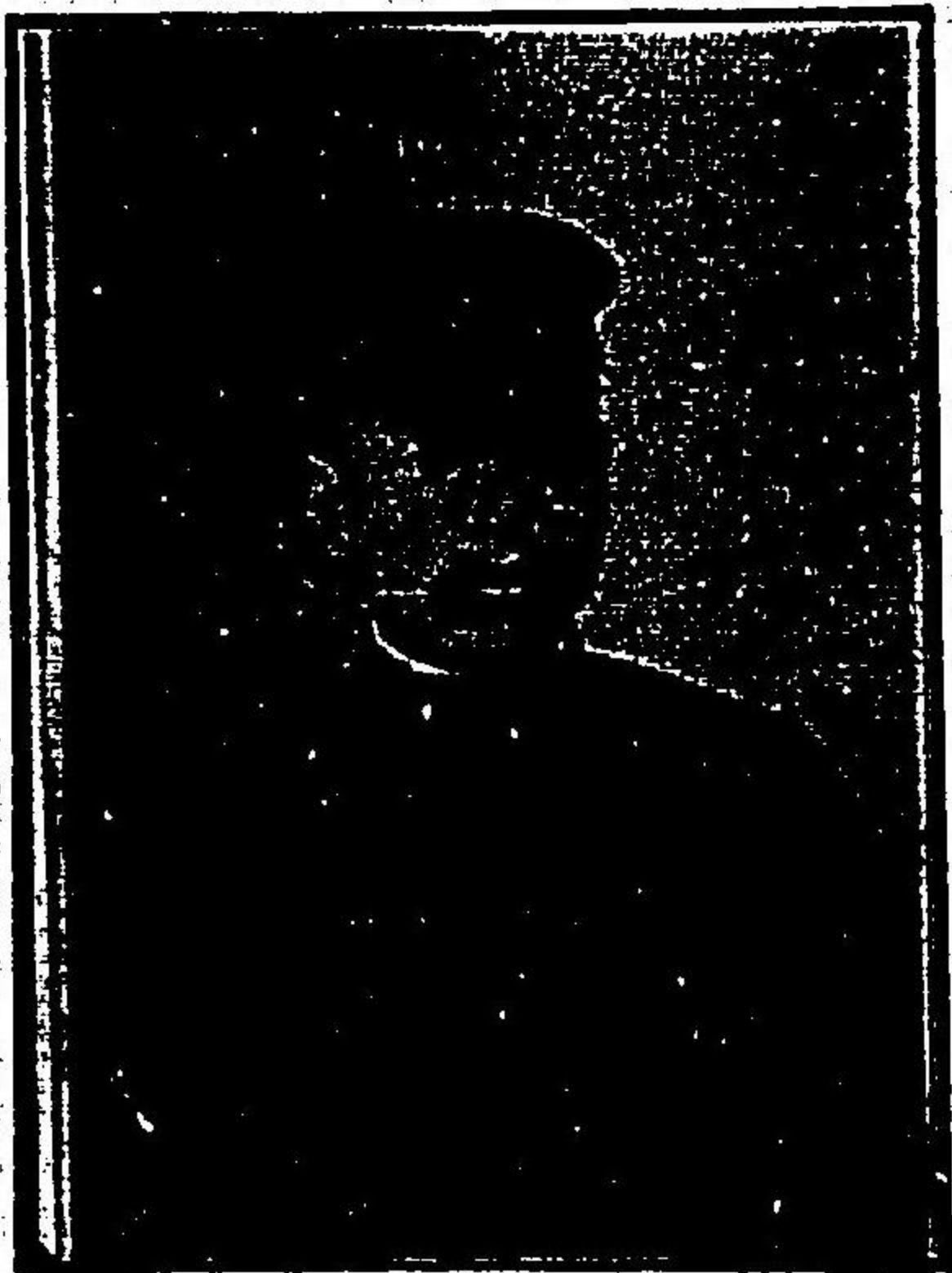
同年四月内務省醫術開業免状を受有、七月、大阪府立高等醫學校病院醫員を命せられたるが、九月に至り故ありて高等醫學校助手兼病院醫員を辭し同時に滋賀縣大津市日本赤十字社滋賀支部病院、内科、小兒科、婦人科醫員を命せらる。

同三十九年十月日本赤十字社滋賀支部病院を辭し、同年十二月より其郷

里なる大阪府下泉南郡南近義村大字橋本に於て親父と共に門戸を張り、超へて四十年六月、現在の場所に開業し、専ら小兒科の施療に従事す、爾後星霜を重ねる事未だ甚だ淺きも、來つて治療を乞ふもの日に多きを加へ名聲現に噴々たり。

君、天資沈着にして學に志すこと頗る篤く、造詣甚だ深し、殊に其親に事ふる極めて厚く、刀圭家中孝順を以て名あり、人に接する温厚篤實實に醫家として適材なる而已ならず、特に小兒科醫師として其最も適良なるを覺ゆ。

君一たび洋々春の如き温顔を以て小兒の患者に接するや、患者は進んで之に懐かしみ、喜んで其施療を受くこと云ふ、斯の如きは素より君の資性が溫柔敦厚なるの致すところは云へ、誠心誠意其職に盡して尙くも怠らざる覺悟の在て存するにあらずんば、焉んぞ能く爰に至らんや於是乎、君の職責を重んずること、其親に事へて孝順、學を修めて熱實なるの程度に譲らざる知るべき也。



準備醫官二等正醫  
七位勳六等  
醫學得業士

### 奥野平三郎君

和歌山縣海草郡西山東村

明治十一年十二月を以て現住所なる和歌山縣海草郡西山東村に生る、君の家は世々醫を以て立つ、父祖の時代より地方の名望家なり、和歌山中學校を出で京都府立醫學校に學び、明治三十四年六月、乃はち二十二歳にして同校を卒業す、後三十七年九月日露戰役の起るや、君は軍に従て出征、翌三十八年十二月、平和克復と同時に凱旋、三十九年一月始めて郷里に開業、以て今日に至れり。

君は斯の如く有福の家に育ち、比較的單純の經歷を閲し、圓滿の成育を遂げたるだけ其れだけ資性篤實温良、一見貴公子の風あり、其醫道に従事

するや、仁愛と同情とを生命として患者に接し、未だ曾て藥價を請求したることなしと云ふ、現代世に醫商多し、所謂藥九層倍の暴利を占めて晏如たるもの尠からず、此時代に於て君の如く時流に媚びず、稜々たる氣骨を以て天職を守り、敢て食らざるは蓋し異數と謂ふ可し、故を以て盛名遠近に鳴り、相傳へて君の徳を稱す。

君は單に醫流に於て盛名を馳せつゝある而已ならず、辯論の雄者にして社交上に於ける勢力、隱然として四隣を壓す、現に土地の郵便局長たる一事に觀るも、以て其多角多方面に勢力を張りつゝあることを知るに足るべし、君の社交上に於ける勢力は、素より其門地に依るもの尠からずと雖、而も君の才能が獨り一方に偏局せず、所謂往くとして可ならざるはなく、加ふるに天資高潔、能く長者たるの態度を辱かしめざるもの、亦以て其今日ある所以ならずとせず、君尙ほ春秋に富む、此才能と此美德を有して而も徳望隠れなき此門地を襲ぐ、前途頗る有望なりと謂ふべし、希はくは其れ自重加養せよ。



醫學士 竹村易二君

大阪府堺市市之町

君は大阪府下南河内郡に生れ、後堺市の名門竹村茂翁の知遇を受け、終  
に入て其嗣子となる、富田林中學校を卒業して第三高等學校に入り、更に  
京都醫科大學に入る。

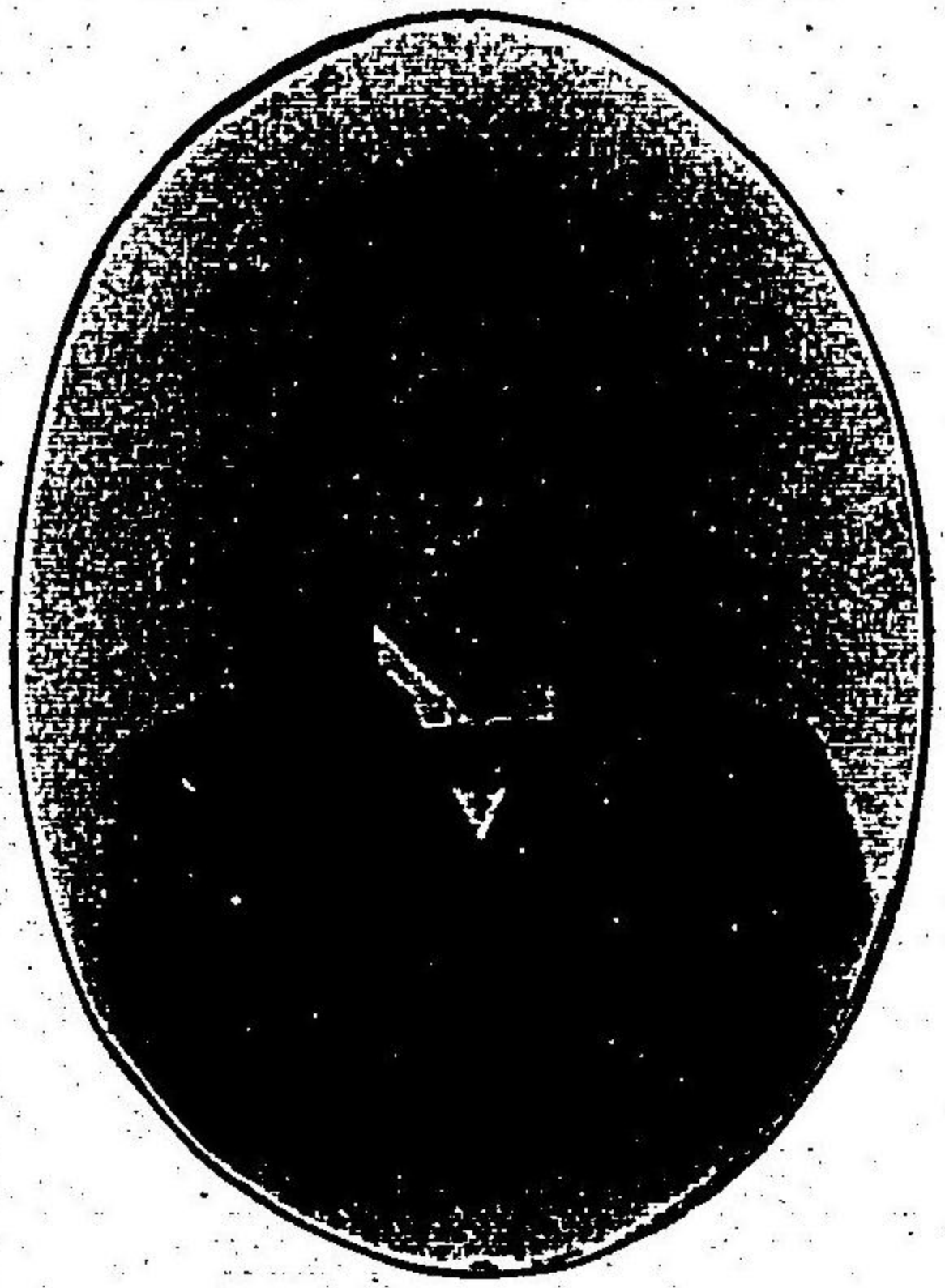
明治四十一年十一月京都醫科大學を卒業し、直ちに同大學病院内科に入  
り、教授笠原醫學博士指導の下に内科を専攻すること約二年、當時笠原博  
士門下に於て俊才の名あり。

四十三年十一月京都醫科大學病院を辭し、堺市に開業して専ら内科、小  
兒科の治療に従事す、乃はち開業後僅かに數ヶ月を閲したるに過ぎざるも、

盛名忽ち四隣に響き、來りて診を乞ふもの門前市を爲すの盛況を呈せり、  
故を以て從來の醫院にては到底狹隘を免れざるより、目下病院新築中にし  
て、近く之が竣成の曉は更に幾多の患者を收容すべく、前途頗る有望と謂  
ふべし。

君天資英敏にして剛健、能く將來の計を成し、志を悠久永遠に馳せて偉  
大の成功を期す、殊に其の氣品高潔にして性質の温良なる点は乃はち竹村  
茂翁の知遇を受けたる所以なりとす、幼時にして既に然り、況してや年齒  
漸く加はり、具さに世路を経來りて醇化せる今日に於てをや、親しく君に  
接するものは、一見其八面玲瓏の社交家たるを看取すべし。

吾人をして更らに一言を加へしめよ、君は稜々たる奇骨あり、且つ縦横  
踏破の才氣あり、而して大志鬱勃掩ふべからざるものあり、而も之を包む  
に温乎珠の如き風采と、洒々落落たる社交振りを以てす、蓋し是れ君が現  
在に於て光明を有し、將來に向つて樂しき希望を有する所以ならん乎、切  
に君の大成を祈る。



堺市醫師會副會長

陸軍三等軍醫  
正八位  
醫學得業士

大槻 修君

大阪府堺市櫛屋町

君は明治十年四月を以て現住所なる堺市櫛屋町に生れ、幼にして東京に移り、本郷尋常高等小學校を卒業して大阪に歸り、當時東區淡路町四丁目に在りし私立豫章館に學び、以て普通學の素養を積みぬ。

明治二十九年九月元第五高等學校醫學部に入り、同三十年九月大阪府立醫學校本科第二級に編入せられたるが、超へて三十一年十一月不幸にも病魔の襲ふところとなり、中途退學の止むを得ざるに至る。

同三十三年九月病癒へて復校、同三十六年十月を以て同校を卒業し、同年十一月より同校病院内科に於て、坪井博士指導の下に醫術研究中、三十

七年三月陸軍勳員令により入營し、同年八月陸軍三等軍醫に任せられ、軍に従つて大に貢獻するところあらんとせしが、會々病に罹り、僅々二ヶ月にして退役、十二月再び大阪府立高等醫學校病院内科に入り、醫務に従事すること約五ヶ月、而して此間刻苦精勵、能く實地の練習を積み得たるを以て、乃はち三十八年五月職を辭して堺市に歸り、現住所に開業し、以て今日に至れり、開業以來其名聲年と共に揚り、現に來つて治療を乞ふもの門前市を爲すの盛況を呈しつゝある而已ならず、熊野、市岡尋常小學校々醫の囑を受け、且つ堺市醫師會副會長、傳染病豫防委員、堺私立衛生會幹事等の名譽職を帯へり。

君は高潔にして氣思あり、而も温良篤實の君子人にして、其温乎玉の如き風采を以て人に接し、醇々として善く説き善く談じ、對手をして自づから其徳に感せしむる点は、醫家として適好の資質を備へたりと謂ふべし、既に此資質を備ふ、患者に對して親切懇到なるは論を待たず、宜なり開業後未だ數年を出でざるに、名聲大に揚れる事。

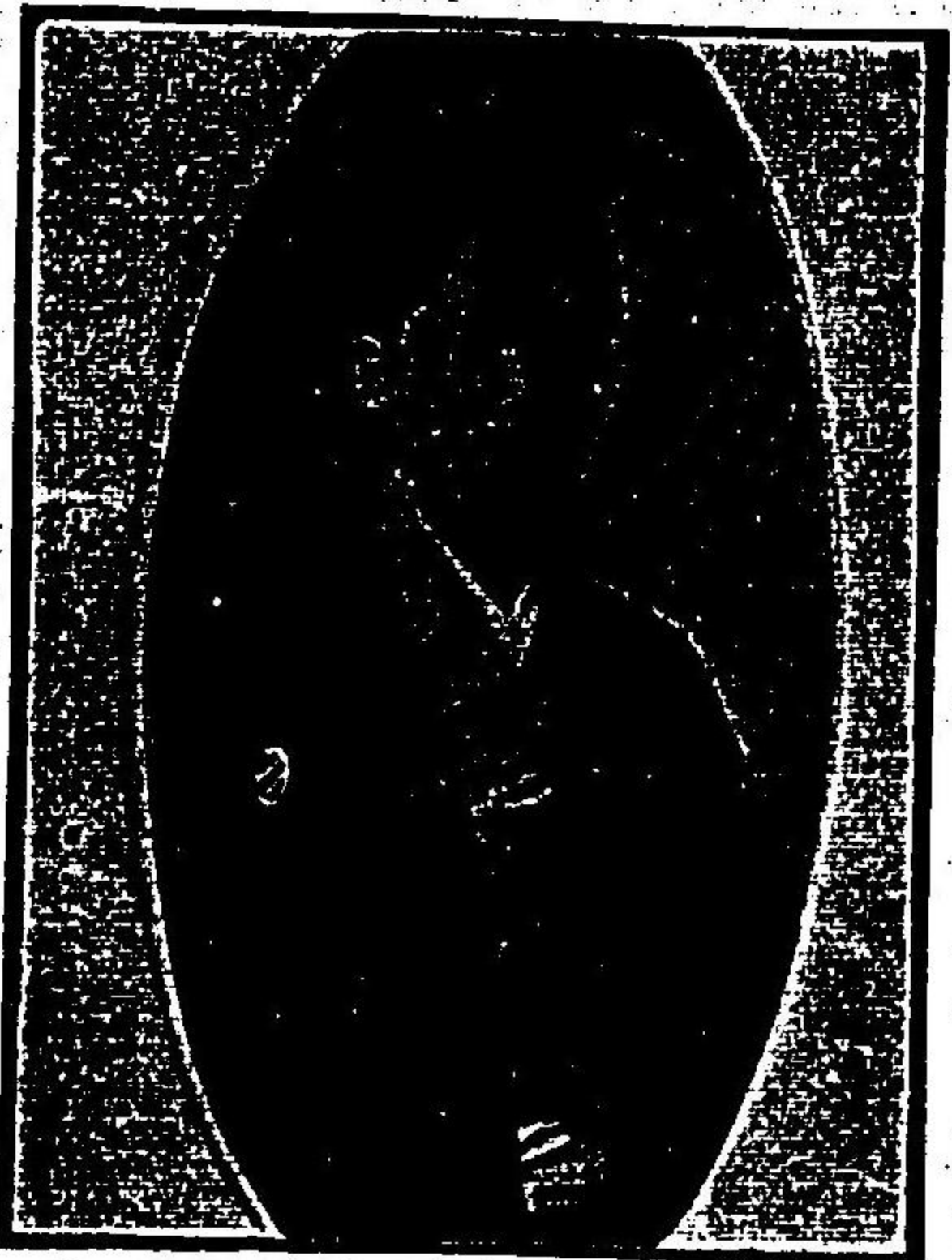


山崎良吉君

京都府船井郡須知町

君が岳父良達君は醫を以て地方に其名を爲せるの人なり、左れども性活潑にして黄金を見る土芥の如し、随つて得れば随つて之を市井に貧家に投じて救助の資に充て、身を持する頗る淡く好んで清貧を樂しむ、此に於て君が父業を繼がんとするも資の之れに提供すべきなし、君奮然として惟うて男兒宜しく獨立獨行天下に行くべきなりと、或る夜窃かに關門を抜け出で、大阪に奔る、父君君を求むる急なるも其の處在を知るに苦しむ、後大阪に君のあるを知りて安堵の意を爲せしも敢へて追窮せず却つて君を劇勵して學業に坑せしむ、君即ち先づ大阪慈惠病院醫學校に入りて學び、後東

京醫學專門學校濟生學會に轉じ、非常なる苦學を積み開業試験に應じて首尾克く及第し、錦衣歸郷の上一家を爲して今日に至る、艱難汝を殊にす、珠磨がされば光りを放たず、勤勉は幸福の母なり、之れ等の格言は君が其の苦學中眷々服膺して一日も其の坐右に忘れず、暗誦しては自己を鞭打したる勵言なりき、蓋し君が資性不撓不屈の精神に富むと其の意志堅實にして燃ゆるが如き一道の氣魄とは確かに君の今日あらしめたる所以にして、後進子弟が取りて以て模範とすべきに足る言行の一二にして止らざるものあり、君近時書畫に趣味を持ち閑餘斯の古趣味に對して其の詩懷を遣れりと、君も亦是れ京都府醫界の一異彩たる哉。



大阪府中河内郡醫師會幹事

醫師 末田 茂吉君

大阪府中河内郡  
牧岡村大字豊浦

君は山口縣豊浦郡豊東村の人なり、明治七年六月を以て生る、君幼にして聰明英智、小學校に學ぶころ、既に神童を以て稱せられ郷閭の間、名爲に噴々たるものありき、長するに及んで醫學に志し、笈を負ふて大阪に來り、日夜刻苦精勵、斯學の研鑽に腐心しつゝあること數年、遂に志を得て醫術開業試験に登第し、帷を現地に下して門戸を張れり。

君性温厚篤實の人なるも、堅忍不拔の氣象を有することは、拮据匪勉、苦學を怠らざりしを以て、其克心勵精の念に富むを知るに足るべく、到底尋常一様の徒の企及する能はざる所、特に推重するに足るものあらずんば

あらず。

君は漢文學の造詣淺からず、又歌道に長じ、詩賦に文章に、和歌に、堂々、大家の累を靡せんこと、就中七絶に於て其長を見る、清新唱すべきものあり、君夜深ふして緝く唐賢三昧集、又は韓魏六朝の昔に遡り、詩品の評隲に鷄鳴曉を報するを知らず、時に七絶の妙句を漁り得て莞爾たる其趣味又頗る雅ならずや。

賦得勅題社頭松

雄姿秀麗古宮松。老幹美髯似巨龍。

紫靄横枝春色動。日華初出彩雲濃。

御題寒月照梅花

咲く花も霜になり行く心地して

秋の月 梅の梢にさゆる月かな

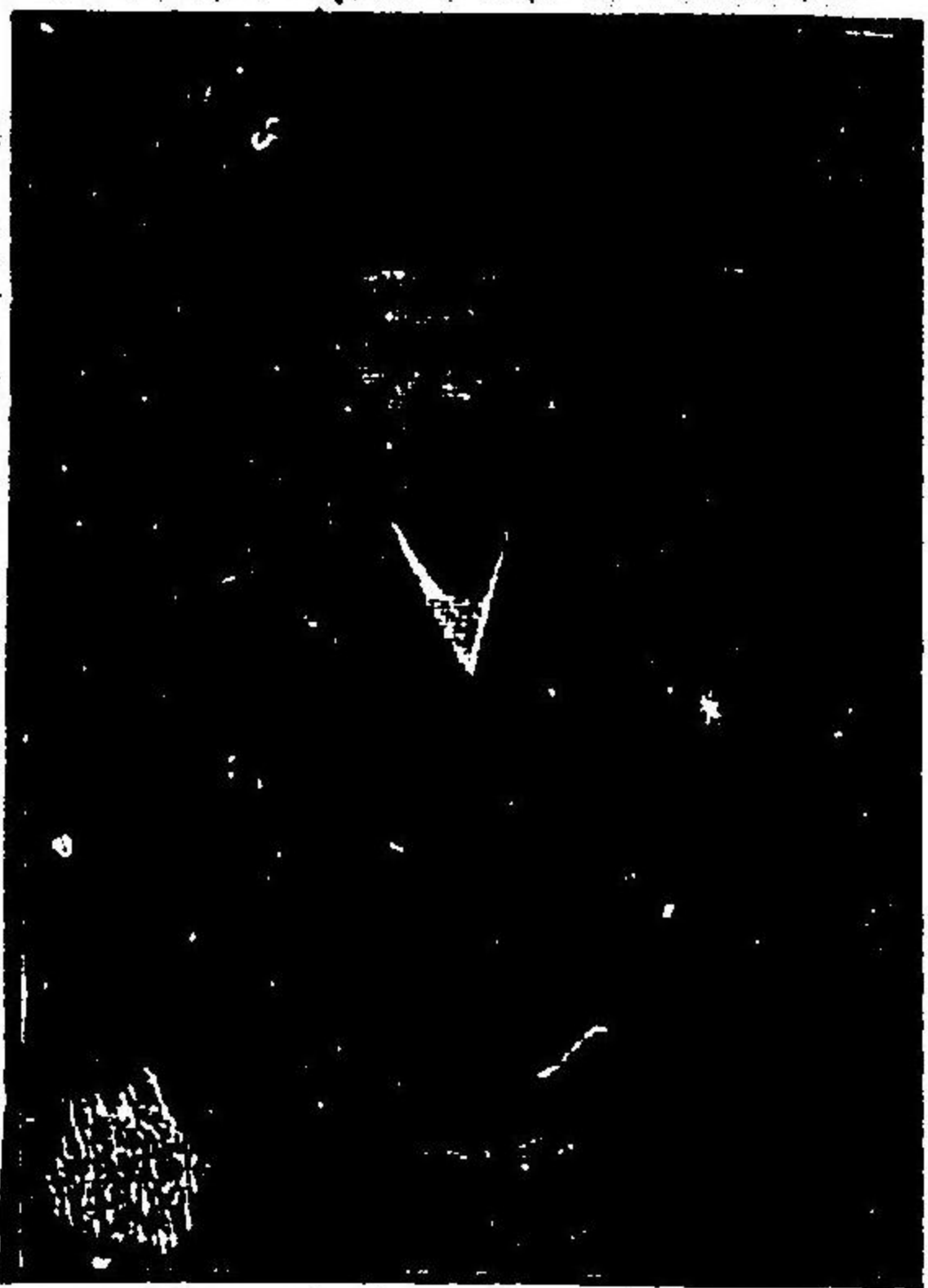
塵の世と思へぬ秋の月の夜かな

君は往助の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫師 笠原春之助君

大阪府泉南郡貝塚町

一世の俠醫にして、人格崇高、品藻亦た甚だ純、性、恬談磊々落落、權勢に恃まず、富貴に淫せず、滔々醫弊を爲せる、俗情野趣の中にありて、昂々然たり、脩々乎として、其天職を行ふもの、笠原君即ち是れ。  
君、若冠にして業を卒へ、來つて帷を南海の地に下すや、其患者に向て頗る鄭重懇切なる、爲めに其勢隆乎たるものありと傳へらる、吾人は光榮ある君の半世の歴史を聞かんとするも、君莞爾として答へず、爲めに其精を尽さざるものあり、遺憾、今の醫界にありて清健君の如きの猶ほ健在せるを見る、大に人心を強うするものあり、衷心よりして其壽福を祈る。



私立博愛病院長  
醫學得業士 弓場貫一君

兵庫縣豊能郡池田町

池田町阜月山の中腹、老松古杉樹として天を掩ふ一仙寰あり、裡に巍然として聳ゆる一高厦あり、名けて博愛病院と云ふ、院長は斯界の名國手貫一君弓場氏なり、君は兵庫縣有馬郡名鹽村の人、關西醫界の權威たる大阪の緒方氏は實に君と姻戚たり、君明治十三年を以て生れ、幼にして河原進翁に漢籍を修め、長じて大阪高等醫學校に入り三十三年を以て卒業す、後東京に出で永樂病院に助手たり、又外科界の泰斗中山森彦氏の助手たりしが、主席松尾氏の他に赴任するに當り推されて其の後を繼ぐ、同院の手術は君の手術に依りて發揮され、君の令聞斯界に響く、君は東都を以て成

業の地と爲し、殊麻甚だ努め、令聞高かりしに、長兄五郎氏の急に赴くこととなり、行李勿々郷里に歸り、竹田尾に在りて家兄を助く、後明治三十六年大阪に來り、高安病院に入り、高安博士に師事して、内臓外科を専攻して、造詣頗る深し、三十九年現地に開業して、今日に至れり、君は手術に對し、其の用意の周到なる確かに、君が一大特點とも云ふべく、斯界の稱賛蓋し宜なりと云ふべし、君嘗つて大阪に在りし頃、北野寒山寺に參禪し、悟脱克く徹底して、超凡の資質に富む、資性磊々落落として、俠氣に富み、事に臨みて失言せず、而かも綽々として餘裕あり、即ち禪より來る美德と云ふべきなり、君が居室、室生平峽山師の筆に成る不倒翁の一幅を掲ぐ、壁間と君とを對照し來つて君の言論に接す、夫れ君の半面の資性、風貌、氣魄躍如として、跳るを見る



醫師 岩井興之助君

大阪府泉南郡深日村

君は京都府立醫學校の出身なり、君初め明治十六年和歌山縣立醫學校に入り、醫學の研究を爲す居ること二年、中途不幸にして和歌山縣立醫學校の廢校解散の擧あるに際し、明治十九年轉じて京都府立醫學校に入りて、四年級に編入さる、夫れより二十一年全科を卒業し、其後今の醫科大學教授猪子醫學博士、淺山醫學博士、齋藤仙也氏等に親炙して、實地の研鑽を爲す數年來つて現地に業を開き、今日に至る。

君は紀伊國伊都郡九度山村の産にして、明治元年九月を以て生る、乃父は醫を以て業となす、君幼にして漢學を家庭に學ひ、十四五歳にして出て

て和歌山市に至り、倉田積氏に就きて漢學を修む、明治十九年京都に出づるの時迄研學に餘念なかりしと云ふ、君の文藻に富める故なきに非らざるなり。

君資性磊落にして邊幅を飾らず、謹嚴正直自ら持し、又家を治むる儉素其門戸の質素にして、最も眞面目に、醫士として天職を遵守し、一般患者に對して意盡し情悉し、未だ常に人の不平を聴くものあらざるもの、是れ君の君たる所以にして、其地方に重きをなす理由、亦全く此に存す、君の趣味は書畫骨董を愛す園藝も亦君の好む所なり。



醫學得業士

箕面病院長  
進藤進君

大阪府豊能郡池田町

進藤君は大阪府下豊能郡麻田村の人なり、君が家代々麻田藩主青木侯に仕ふ、明治七年十一月君は其藩邸に生る、幼にして穎悟群兒に異なりて頗る伶俐なりしと云ふ、業を大阪市堂島中學校に卒へ進んで明治貳十四年岡山醫學専門學校に入る二十八年醫學各科を卒へて同校を卒業し、歸來大阪府立病院に助手となり、故井上平造氏に親炙して外科の専攻をなす時に明治三十年二月なりき、超へて三十六年同院を辭し東京市に至りて細菌科を研究する一ヶ年餘再び郷里に歸りて、豊能郡池田町猪名川畔に地を卜し、外科専門の病院を開く、君が多年蘊蓄せる研學の餘に成れる、運刀の妙は

天稟の才識を有するに似たり、君が今日の進境ある其盛名を馳せつゝある蓋し天品に加ふるに多年の練修を以てするにあらずんば、決して能はざるなり、君は四十三年七月并つて久富吉廣君が多年の經營に爲りし、天下隨一の勝域箕面公園内の脚氣病院を譲り受け風光明媚の地に空氣清淨にして閑靜なる處にウキラー式病院を起すに至れり此大公園内にありて一種の雅味を帯ひたる處、腦神經科に必適し其設備眞に君の理想に合すと云ふべし又一面に君は帝國鐵泉株式會社、箕面有馬電氣軌道株式會社、鐵道院等の囑托醫たり。

君が霸氣滿々たるが如きに似ず、其資性は温良にして人と争ふ事を好まざ然れども時に縦横の論議を試むるや、古端風生の慨あり、事に臨むでは凛乎として、犯すべからず、熱烈の氣に富みて任侠の風あり、君が強健なる精力と透徹せる頭腦を有せる事は君の過去が全く奮闘に爲りしものにして半面の歴史は之を證し得て餘りありと云ふべし、君春秋に富む不屈不撓層一層乞ふ之れを旃めよ。



醫學得業士

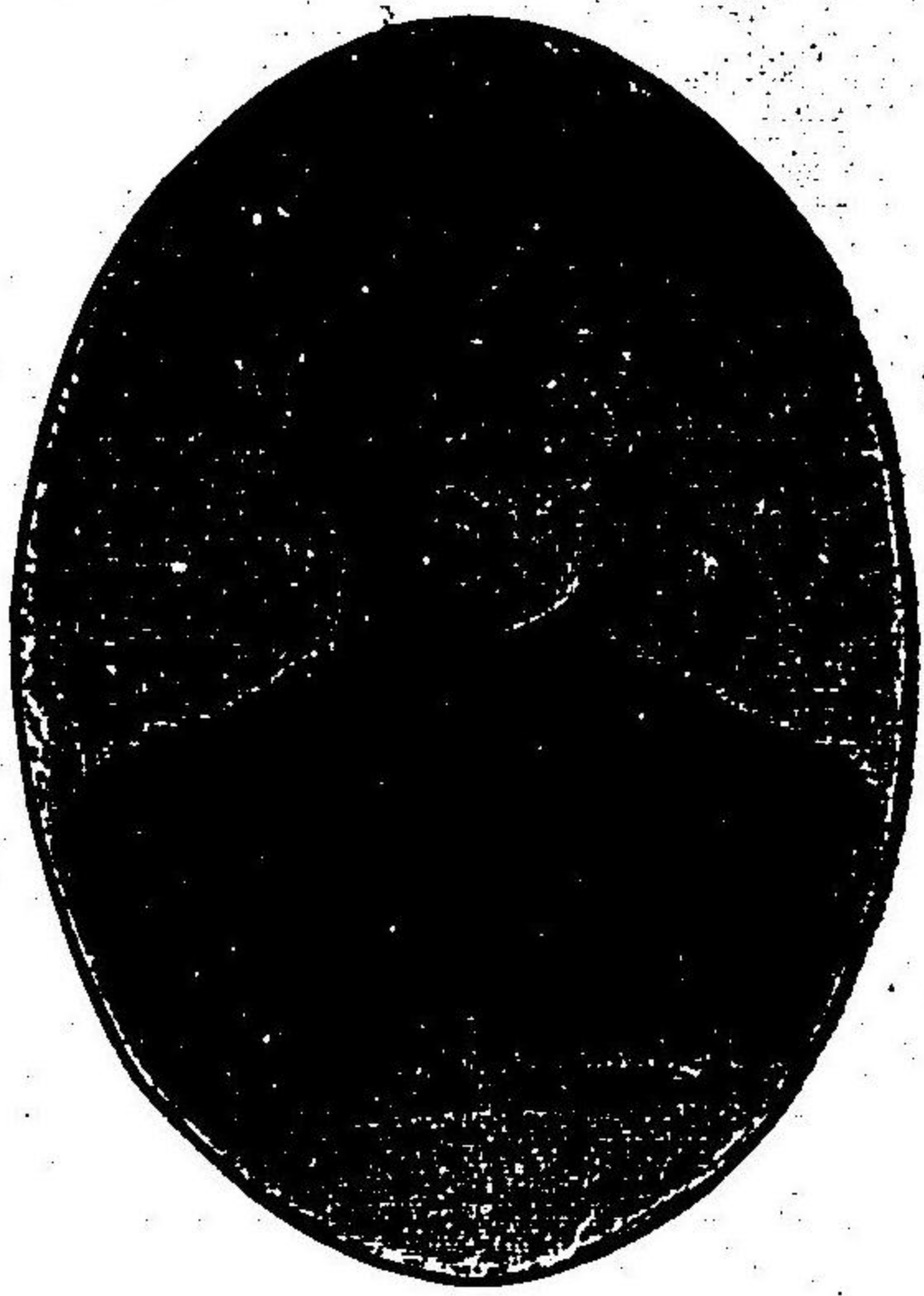
### 木村得齋君

和歌山縣那賀郡勢田

君は慶應元年十月を以て、和歌山縣那賀郡山崎村に産る、家世々農を以て業となす、君長するに及びて刀圭の道に志し、和歌山市に出で縣立醫學校に入りて研學する年あり、偶々縣立醫學校の廢校の悲運に遭遇し去て京都府立醫學校に轉す時に明治三十年秋なりき、居ること四年遂に同校を卒業す、其の京都府醫學校に在るの日、眼科に志し淺山醫學博士に親炙して最も熱心に斯科の研鑽に従事したりと云ふ、京都府立醫學校を卒業するや京都市の名士半井國手に據りて實地の研究をなし傍ら本願寺に仕事したりと聞く、明治三十二年東京市に至りて、濱田醫學博士に師事して婦人科學

の指導を受け、又東京駿河臺井上眼病院に入りて眼科の研究をなし、偉大の獲物を積み重ねて郡賀郡に歸り現地に門戸を開く其の名を慕ひ來つて診を受くるもの日に數百を以て數へたりと云ふ、家門益々榮ゆ、君は自家開業の餘暇を以て、郡醫、高等小學校校醫を囑托せらる、又三十四年より今日に至るまで郡賀郡立産婆學校講師として其養成したる産婆の數實に六十名の多きに至る。

君は資性磊落にして些の城府を設けず客を引いて善く談じ善く語る、社交の巧妙なる何人をも悦服せしむ、同情心に深く患者に對して眞摯にして熱心且つ親切に治術を講じて餘念なし、爲めに其の盛名遠近に馳す、君鳥鷲の戦に長ず、又家に駿馬貳頭を養ふて撫育す、之れ君の道樂乎。



陸軍一等軍醫  
正七位  
醫學得業士

松井新藏君

大阪府河内郡  
小阪村字上小阪

君は河内國上小坂村の人なり、家世々農を以て業とす、君若ふして醫に志し小學校及中學校の業を卒へて東京に出で後千葉醫學專門學校に入り、醫術を研究する年あり、同校を卒業し陸軍軍醫となり累進して陸軍一等軍醫となる、今や君が郷里に歸りて、醫業を開く遠近傳へて來り診を乞ふもの踵を接して至る爲に盛名大に揚る。

君人と爲り沈黙寡言、嗜好としては主として讀書あるのみ、頗る明快なる頭腦を有し、強氣にして意思も亦堅實なり、又人に接して圭角なく、温厚にして驕慢ならず、完全なる資質中に犯すべからざるの威嚴を備ふ、口

「たゞ啓けば談論風發の概あるも、概じて温健にして、微温的なり君も亦  
實に當世に推重すべきの人。」



醫士 根來壽輔君

和歌山縣有田郡保田村  
字 下 中 島

君は紀伊和歌山の人、文久元年二月を以て産る。

累世醫を以て業となす、舊和歌山の藩士たり、幼にして和歌山郡小學校  
を卒業し、和歌山の儒者秋月鼎氏に従ふて漢籍を學ぶ且つ詩文に長せり、  
明治十二年和歌山縣立醫學校に入り醫學の研鑽を爲す、十五年五月全科を  
卒業し、十六年現地に來つて門を開く内科小兒科は其の専門とするところ  
なり、性謙讓眞摯、毫末の虚飾する所あるなし舉世滔々大風呂敷に陥れる  
今日に於て君の如きは誠に推稱すべき好個の一人格たらすんばあらし君固  
と口雄ならざるも宛ら蠶の糸を吐くが如く、淳々として竭くるを知らず、而



して社交場裡に臨んでは實に温良端直の好紳士を以てせらる。君に令息、  
令嬢あり息は今や名古屋第八高第三部に有り、嬢は和歌山高等女學校を卒  
業し、東京女醫學校に學び既に前期後期の學科を卒へて東京に有つて斯道  
の研鑽に餘念なきもの、如く、特に才媛を以て聞ゆ。



紀伊郡立産婆學校長

醫士 大橋 政之君

京都府伏見町字  
京町三丁目

君は我が杏林界の先覺者として噴傳せられたる、京都小森信濃守の末裔  
なり。

君は清廉潔淨、莊重謹嚴を以て聞ゆ、其多少保守的傾向あるは、精神的  
修養に重きを置きたる結果ならんか、眞率卒直、平然として些の邊幅を飾  
らず、毀譽褒貶更に意に介せず、輕佻浮薄なる時流に超出して一種の奇骨  
稜々として奪ふ可からざるものあり、其地方に於て一變人となす君の變人  
たるや、節操ありて中々當代に獲易からざる名士なり。

政之君は元治元年四月京都に生る、同年十二月京都兵亂の爲に父母に擁

せられて難を古郷伏見町に避く、幼にして嚴父に養はる、明治十年大阪に  
來つて小學校に入り長するに及んで英語を修め再び京都に歸りて、京都獨  
乙語學校に修業す此年八月養父山梨縣病院長として赴任するや君亦從ふて  
甲斐に赴く當時其副院長たりし渡忠純氏が君が氣骨と節操を愛して、始終  
薰陶する所多かりしと云ふ、渡氏の京都醫學學校に講師となるや君又從ふて  
京都に歸る、幾許もなくして渡忠純氏永眠す、君は此恩師に永別し再び出  
で、東京に至り故樫村醫學博士、濱田醫學博士に師事し醫學の研鑽を爲す  
時に明治十九年なりき、後二十三年東京醫科大學撰科に學び、業就るの後  
君大に雄飛の偉志ありしも病の爲に果たさず、遂に伏見町に病を養ふて歸  
臥し傍ら門戸を開きて産科婦人科を専門となす、盛名四方に馳す、又三十  
二年創立の桃山産婆學校の校長として、十年一日の如く、其薰陶につとめ  
無報酬にて時間を割愛し、専心之れに従事しつゝありて、君の示導の下に  
産婆の卒業證を得たるもの實に數百の多きに及ぶと傳へらる、嗚呼君も斯  
界に於ける一大恩人なる哉。



ドクトル  
メナチーネ

上田敬治君

奈良市寺林町

上田君は和州郡山の人なり、後上田氏の嗣子となる。

君は意思の人にして、天稟の才氣横溢せるが如く、治療上の膽氣、又人  
の服するところ、其不歸の人を起たしめ奇効を奏したる類例甚だ多し、既  
に岡山醫專時代より校中の俊才を以て知られ、桂田醫學博士の助手として  
聲名ありたるのみならず、君また英、獨、佛の語學に精通し、其福岡醫科  
大學に有りて、他の最も難しとするところに向つて忠實に研鑽を爲す、篤  
學君の如きにあらずんば蓋し能はざる所なり。

君往年自費を以て歐州に航し、専門醫學の研究に従事す其志す所や内科

特に神経に於てす、社會生存競争の激烈に連れ、當然起り來るべき神経系科に研究を積むに至りたるは、其識の凡ならざるを知るに足る。

君が雄邁にして不屈の非凡の精力家たるは、曩きに在歐苦學數年、其研學も亦英、獨、埃、佛、多方面の諸學者に親炙して、偉大の獲物を積み重ねたるに之を證すべし、而してその蘊蓄涵養は凝つて論文となり、一得業士の身を以つてして歐州のブローヘッソルをして驚嘆措く能はざらしむるものありと云ふ、時に年纔に二十有六なりしと云ふ、篤學精勵君の如きは當代獲易からざるの人たり、借問す彼の豊富の官費を得て三千里外に寢を負ひ、伯林城頭影暗き所、私窩子の懷に眠る留學生輩豈に漸死するの感なき乎。

君溫重にして寛容大家の風あり、頭腦の明晰と篤學を以て知らる、年少時代より才氣穎脱し小中學校より常に首席を占め特に岡山醫專に有るや其特待生たりしなり、君は聲利に遠き人なり、年尚若きも氣品の高潔を以て多大の崇敬を受けつゝあり嗜好としては唯讀書あるのみと云へり。



私立七山病院長

醫師 本多 榮君

大阪府泉南郡熊取村  
大字七山拾八番屋敷

繁華喧鬧の地に倚らず、地方の一名醫として陰然士民の名聲を負ふもの我が本多榮君に於て始めて之れを見る。

君は安政三年十二月を以て大阪府泉南郡熊取村大字七山に産る、累世醫を以て業とす、幼にして漢籍を舊岸和田藩士大塚主膳に學ひ、後河野通行及山井東氏に就き漢籍並に普通學を修む、長するに及んで土屋弘、頼達堂の二氏に従ひ漢籍詩文を究む。

明治元年一月より四年に至る迄、先考義愷翁に内科、外科、特に精神、神経系科を家庭に學ぶ、五年春より大阪病院に入りて醫學の研鑽を爲すこ

三年、七年より舊堺縣醫學校に入り、十三年五月醫學全科を卒業す、十三年八月郷里に歸りて家祖の業を襲ふ、君が家世々精神科を以て専門となすこれより名醫として遠近に推重さる。

君は精神科、神経系科に老熟せる手腕を有し、資性温厚にして人と争はず、堅忍不拔事に臨んで難を辭せず、氣骨稜々義氣に富む、特に吾人の最も敬服する所は直言直行にして顯貴に阿附せず、名利に淡なるの一事にあり、且つ君は親愛同情の念に深く、精神病の治療は市塵熱鬧の中にありては到底理想を完ふするものに非ず、郊外にありて閑靜なる土地柄を卜して以て、始めて神経病と精神病の療養に併用するを得べく、特に本病院の建築の完美は、國家衛生上亦必要なりとは君の夙に高唱する所なりき、君今や適切なる理想の病院成り益々不幸なる腦神経、精神病者に精神的慰安を與ふるに適切なる設備を以てし更に資を吝まらずと眞に理想に合すと云ふべし、世の營利本位を以て此の憐れむ可き喪失者を奇貨として、陋態を演じつゝあるもの、須らく反省せざるべからず。



醫學得業士

增田 廣君

滋賀縣大津市堺川町

君が家嚴増田長三郎氏は丹波宮津藩の藩士たり。

君明治九年を以て宮津町馬場先の邸に生る、幼にして寡言群童と戯るゝを好まず、君武門の家に生れ武士的教育を受け、學實敦厚能く努め能く勵む、笈を負ふて京都に出て京都醫學校に學ぶ、比叡風に心膽を練り、鴨涯の流水に前途の學理を考へ、笠雪の苦積來つて學業年と共に進み、明治三十年好成績を以て京都醫學校を卒業して錦衣閩門に入る、不幸間もなく二豎の侵す處となり閑地に就きて靜養し風雪の來るを待つ、果然日露戰役起る君召されて從軍し、滿洲に出征し各地に轉じて軍功あり、戰退んで後一

度歸郷爲したるが速く懇囑せられ大津公立病院に入りて眼科醫長の椅子に就く、而して今隆々の名は斯界に馳せ社會の寵兒たり。

君資性沈毅にして寡言、運らに秋辨を弄せざるも、事一度専門學術の事に及べば淳々として其の意義を談論し未だ嘗つて倦まず、對者をして納得首肯せしめざれば止まざるなり、蓋し幼時武門に育ち武士的の教養を受けし之れが一因たるなり、君今や滋賀縣第一流の眼科醫として聲名高く、斯界に貢獻する處又頗る甚大なるものあり、而も君春秋之れ富んで研究の志愈堅し、前途の榮え燦として輝き、祝福偏べに君が身邊に集中せんとするの觀あり、君又學術以外何等の趣味なく閑隙の割くあれば直ちに書に對し、專念一意愈々學界に其の心命を腐蝕せしめんとす、滋賀縣斯の人あり醫界の事又意を安んじて可なり。



私立伊都病院長

醫師 脇田 欽一君

和歌山縣伊都郡  
妙寺町字中飯峠

世の醫人を擧げて利益の爭奪に醜態せしめ、俗臭紛々たる中にありて超然逸出、恬淡磊々落落、權勢に恃まず、富貴に淫せず、昂々然として、潛心其理想の天職に従ふもの、脇田欽一君即ち是れ。

君明治元年七月を以て和歌山縣海草郡楠見村の農家に産る、幼にして郷里の小學校に學び、稍々長するに及んで和歌山獨修學校に入りて普通學を卒業、明治十五年醫に志し和歌山縣立醫學校に入りて十九年七月同校を卒業す年僅かに十九、秀才を以て稱せらる君未だ齡丁年に滿たず遂に笈を東京に負ふて、順天堂病院に入り佐藤進博士に師事し研究する年あり、明治

二十二年七月現地に來つて醫業を開く。君が外科術に於ける運刀の妙天稟の才を有し、悠悠刀を執つて手術臺の側に立ち、睨一睨、靜かに患部に刀を下し、自若迫らざるの態度と且つ其敏腕とは、眞に堂々たる觀あり、特に君が同情に富むの大なる、漫りに其創白を大にして、派手の手術を爲し以て自己の技倆を素人に誇る材料と爲すが如き陋劣野卑なるものと大に其撰を異にし、高潔同情の心を以て、其快腕を揮ふ所、眞に鬼手佛心、大に推尙するに足る所以たり。

君の名聲隆々として遠近に馳す、遂に四十二年三月伊都病院を新築し院長となる、其傍ら郡の檢疫醫たり。

君資性卓落不羈、時に縱横の論議を爲すや、古端風生の慨あり、熱烈にして任侠の風あり、克己の心に富み、精力の旺盛を以て知らる、單り自家の業務のみに止まらず、公共的の事項に對して頗る貢獻するところ多し、彼の紀和實業新聞は君の經營にして、常に侃諤の論議を爲して憚らず、地方に罕に見る成功を得つゝあり、大丈夫の本懐何ぞ之に過ぎん哉。



醫士 垣内萬壽太郎君

和歌山縣有田郡  
箕面田字箕田

君は舊姓を上田氏と稱し、其先考は紀州田邊の藩士たり、文久貳年三月を以て生る、幼にして田邊小學校に學び、長するに及んで和歌山縣立醫學校に入る、時に明治十三年なり、十五年同校を卒業し、和歌山縣立醫學校病院出仕を命ぜらる、偶々吉村英徹君の有田郡湯淺町に郡者病院を開くに際し聘せられ入りて醫員となる、明治十八年其職を辭し現地に來りて門を開く、内科は君の専門として特殊の技能を有すと傳へらる、二十四年東京醫科大學撰科國家醫學に入りて研究を爲し再び歸りて業を始む。

資性溫良にして漫りに人ど争ふが如きことなく、君子人の風あるも談論

一とたひ専門の事に及ばば淳々として推理的の論議をなす、其純朴にして些の街華の風氣あるなく、克く職に忠實に孜々として倦色を見ざるの態度と性格は尋常一様の徒の容易に企圖し能はさるところなり。  
君は令息三人令嬢三人ありて家庭の圓熟せるは、人皆羨望するところなりと云ふ、君常に子女を膝下に集め道義心の訓練を爲すと聞く、又書畫骨董の愛玩によりて、君の趣味の如何に高潔なるかを證され能ふべきか。



齒科醫士 赤尾 要君

岡山市四中山下

君は明治十四年を以て伊豫國西條町に生る、其家は世々醫を以て藩候に仕ふ、君幼にして郷里の小學校を卒へ、西條中學校に學び、同校を出づるや、笈を負ふて東京に遊び高山齒科學院に修學す。

明治三十五年、内務省の檢定試験を受けて及第、爾來郷里に歸り、家兄の業を助けて齒科診療に従事し、四十年始めて岡山市に來り、獨立開業するに至れり。

君資性剛直、而も天稟の才氣あり、加ふるに東京在學時代に於ける筈雪の苦學は、能く君を珠化して、獨り圓轉滑脱の世才を養成せる而已ならず

萬難を排して撓まざる精神の鍛練を遂げ、磊々落落として人に接するに城壁を築かざる間に於て、意思頗る堅實、事に當つて屈せざる氣概を有す、技能亦精巧、殊に架工術の如きは其最も熟達するところなり。書畫、骨董に興味を有し、鑑定の明あり、其秘藏に係る珍品佳什甚だ多しと云ふ。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫學得業士 栗山武二君

和歌山縣有田郡  
箕島町大字箕島

明治十六年一月を以て生る、郷里の小學校を終へて和歌山中學に入り、明治三十五年卒業、三十七年岡山醫學專門學校に入り、四十一年卒業、當地岡山市に於ける小兒科の名医たりし伊達氏に就て小兒科を實習す、伊達氏は曾て岡山病院小兒科醫長たり、後辭して岡山に私立病院を設立す、君が氏の門に入りしは、恰も私立病院設立當時にして、君は創業に際して大に盡すところありたるなり。

後岡山の赤澤内科醫院に入りて内科の實習を爲し、明治四十三年十一月に至り乃ち現在の場所に開業、専ら内科小兒科の診療を爲す。



君は性質温雅にして社交に巧なる少壯紳士なり、而も品行方正にして邪路に入らず、専門學術の研究を以て其生命とし、他に何等の嗜好を有せず、年齢尙ほ壯、前途有望なる少壯醫家として推稱するに足る、乞ふ更に自重自愛して將來の大成功を期せよ。



醫學得業士

森 脇 圓 治 君

和歌山縣紀見村字辻

元治元年四月を以て生る、君の家は世々地方の豪農なり、幼時郷里の小學校を卒業し、和歌山の儒者酒井信氏に就て漢籍を修む、後和歌山縣醫學校に入りたるが、明治十八年に入り廢校となりたるを以て、同十九年岡山醫學専門學校に入り、同二十三年卒業、同年より長野村に開業専ら内科の診療に従事し、二十七年同縣橋本町に病院を設置し、超へて三十年現在の場所に移轉開業す。

君が現在の場所に移るや、地方の行政漸く紊れ、弊害百出せるを慨し、奮然起つて政治に奔走し、私財五六千金を投じて時弊の匡正に盡瘁せり、

乃はち地方共有の山林問題を糾明し、端なく伊都郡の大疑獄を惹起して、地方行政上の大革命を遂げたるが如き、其功績の最も顯著なるものなり、曾て縣會議員候補者として鹿を中原に逐ひたるも、不幸にして敗れあり、併しながら其他くまで正義の爲めに盡し、孤軍奮闘毫も節を屈せざりし一事に至りては、深く縣民の感銘するところなり。

君剛氣に富み、意志堅實にして剛直、能く弱者に同情す、而も自ら持すること謹嚴、人に接して禮節を失はず、故を以て地方に於ける名望自から一身に集まる。

君は多年の經驗と深刻なる造詣とに依り内科の名手として有名なる而已ならず、時事を談すること頗る明晰、政治談論家としても大に名望を繋ぐに足るものあり、嗜好趣味は書畫骨董にあり。



醫學得業士

岩崎恭輔君

大阪府下北郡鳳村字大島

明治十一年五月を以て岡山縣英田郡大野村大字川上に生る、岩崎安貞氏の長男なり、世々醫を以て業とす、現に君の兄弟四人皆斯業に従事す、乃ち實弟内海定男氏は陸軍二等軍醫として歩兵第六十四聯隊附醫官たり、牧野融氏は目下東京醫科大學に修業中本年卒業の筈、渡邊克己氏は現に熊本病院外科醫員に勤務せり。

君は明治三十五年十一月を以て長崎醫學專門學校を卒業、三十七年四月第十師團輜重兵第十大隊醫官となり、日露戰役に従軍、至るところ殊功を樹て、三十九年二月凱旋宇品に上陸、三月除隊、右出征中の功勞に依り、

陸軍二等軍醫に任じ、從七位に叙せられ、勳六等單光章を授けらる。四十年十二月大阪府下泉北郡踞尾村に開業、四十四年二月現住地に移轉専ら内科の診療を爲し、傍ら千代田、横濱、有隣等の各生命保險會社診查醫の囑托を受け、同時に踞尾、深井、神石の各村小學校の囑托醫たり。君剛腹にして耐氣あり、而も一面細密の用意を怠らず、旅行に多大の趣味を有す。

君の今日迄の經歷に就て、其最も顯著なる功績を舉れば、明治四十二年末より同四十三年に亘り、府下泉北郡踞尾村に於て、一種異様の病症流行し、多數の死亡者を出せるに際し、多大の研究と材料の蒐集に熱心し、之が結果を報告したる結果、流行性腦脊髄膜炎紫斑志と決定し、從來醫學界に於て研究せられざりしところを研究し、醫界に多大の貢獻を爲したる一事なり、君は今尙ほ進んで該病の症候、經過、治療法に關し、社會衛生の爲め奮て研究を重ねつゝあり、此一事は以て我國醫學史に特筆大書すべき價值あるものなり。



醫師 森田舉太郎君

京都府天田郡福知山町

君は兵庫縣氷上郡幸興村の人、明治廿一年笈を負ふて京都私立獨逸學校藥學部に學ぶ、偶ま明治廿三年三月藥劑師試験に應じて合格す、君竊かに以爲、藥劑士は一個の末技のみ苟も刀圭界に志を立つ、堂々たる門戸を張りて萬民の病痾を診療するにあらずんば、男兒の本懐にあらずと、行李勿々江都に上り櫻井病院の助手として勤務し、婦人科を専攻す、其日常の刻苦勉勵又尋常にあらざるなり。

刻苦勉勵の効は空しからず、其後内務省醫術檢定試験に應じ、是又好成績を以て合格したり、明治廿九年帝都を辭し、福知山に門戸を張りて修得

せる醫術を實地に應用なしぬ、開業茲に四星霜門頭患者を以て充たせり、君の遠大の志ある日進月歩せる斯學の研鑽は日も亦足らずとす、空く小成に安んじて邊土の凡醫を以て終焉せんことを慨し、奮然門戸を鎖して京都帝國大學に入り衛生學講座聽聞の一人となりしは實に明治卅三年秋十月とす。

君は衛生學研鑽の傍ら京都療病院長猪子博士の助手として外科學を究め三十五年十月再び福知山に歸臥して前業を繼承せり、君は此の如くにして三たび學理研究の念を高め、明治三十九年六月東上して東京産科婦人科病學に就き一年有半の造詣は君をして年來の宿志を達したり、依て三たび福知山に歸臥して開業今日に至れりと云ふ。

知るべし如上の經歷を以て君の人格の如何に向上心に富めることを、君學窓を去つて已來、學校醫、警察醫、町醫、檢査醫、等の囑托を受けたりしと雖も、素志は斯學の爲めに飽くまでも研鑽するの覺悟にてあれば、診療の餘暇を割きて内外の學理を研鑽すとは、豈又好個篤學の士にあらずや

君は明治六年五月氷上郡幸興村に生る、資性沈着にして輕浮ならず、彼の滔々たる浮華輕薄の徒と大に其趣きを異にするものあり、嗜好は擔頭に踞して尺八を口にし朗々たる曲奏を爲すと、催眠術の研究にありと、君春秋に富めり前途尙ほ多望なりと謂ふべし。

君は往訪の記者に  
對し陳謝以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫學得業士

柳生嘉純君

大阪市南區日本橋筋二丁目

君は沈黙寡言にして多く語を多く接する底の士にはあらざるなり、不言實行とは蓋し君か唯一の主義なるべし、君明治十年九月大阪醫學校に入る益雪の苦を積み六ヶ年を學窓に研鑽修業し、卒業後明治二十九年一月顯微鏡研究の爲め、東京顯微鏡講習所に入り研究甚だ力む、更らに明治卅四年一月第五回傳染病講習生として傳染病研究所に入り茲にも亦刻苦修養し、明治四十一年には小兒科學講習として弘田博士に學び、四十二年一月には京都醫科大學に開會せられたる、第一回小兒科學講習會に入り、翌年には同大學に於て開催の第三回皮膚病梅毒學講習會に入り、殆んど研究修養に

平日なきもの如し、又君が公的方面の活躍としては、明治十八年九月より三ヶ年間大阪府より薬師開業試験委員を囑托せられ、同十九年には大阪府より検査醫を命ぜられ、同廿三年には大阪慈惠病院の醫員を囑托せられ、廿三年大阪市參事會より種痘醫を囑托せらる、其他三十七八年戦役に際しては第四師團軍醫部より豫備病院附醫員を命ぜられたる等、内務省、大阪府、神戸市等より公衆衛生の爲めに囑托せられたる經歷は、又以て君が半生の歴史を彩るに足るものあり、今現に大阪製薬所醫務囑托を受け令聞噴々たるものあり、經驗と志想とは老熟し來りて君や今方さに活躍奮進の秋たるの概あり。

大阪市齒科醫師會幹事

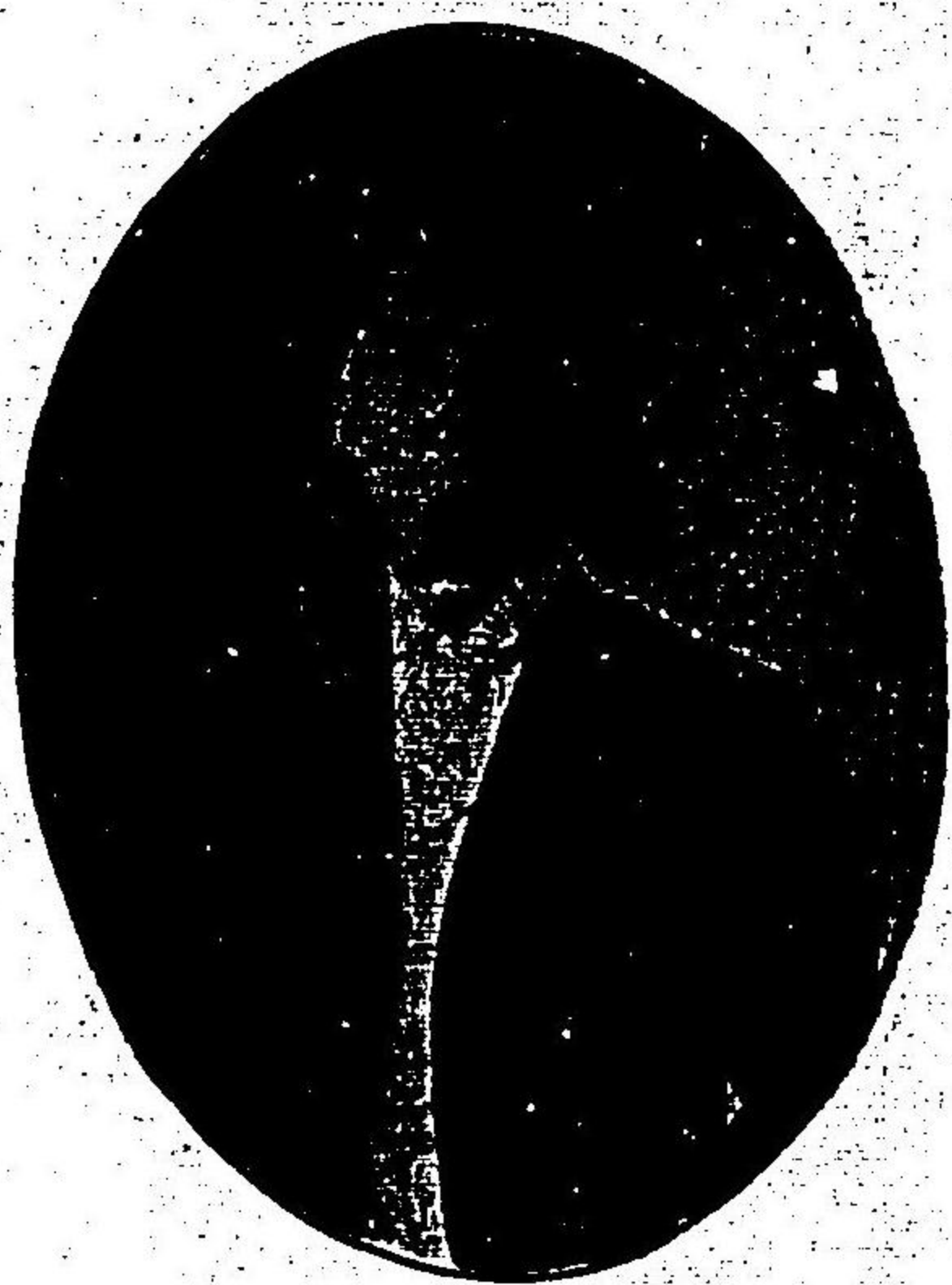
齒科醫師 安東茂次郎君

大阪市西區新町通二丁目

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

君が半生の歴史を飾り、灼爛として光彩陸離たるもの西南戦役あり、君が家代々豊後臼杵稻葉侯に仕へ地方武門の一家家たり、明治十年薩南に動く亂雲の隙々として九州を席捲し西郷軍の來つて君が故郷の邊境を襲ふや一藩の古武士戟を採つて陣頭に起つ、君此時尙若冠にして勇氣凛々聊黨青年輩に重きを爲せり、即ち父に従ひ陸軍に投じて應戦す、君が沈黙寡言にして沈勇の資に富める、當時の武功や多大たりしものあるや必然たり、亂平さて後君は藩主の多大の恩賞あり、次で時の政府よりも尙金品の下賜あり聊黨傳へて其の戦功を激賞せり、明治十七年奮然去つて四方に遊學す、然

るに君が實家日々に非運にして學資又意の如くならず、艱難に處して勇氣百倍するは勇士の常なり、君此時決然として曰く、男兒須らく獨立獨學すべきなりと、爾來日夜を分たす千辛萬苦具さに苦學を積みたるが、明治二十一年内務省の齒科開業試験に應じて及第せり、君が喜悅想察すべきなり君資性沈黙寡言にして敢て冗辯を弄せず、又清廉高潔にして九州男兒の精華を發揮して餘蘊なし、十九年前開業以來斯界の重鎮を以て許され、齒科醫會の設立さるゝや衆望を負ひて幹部の職に就き、今尙繼續して幹部に在りて斯界の爲め改善企圖盡瘁しつゝあり、君も亦是れ斯界の明星と云ふべきなり、君文久元年三月を以て生る。



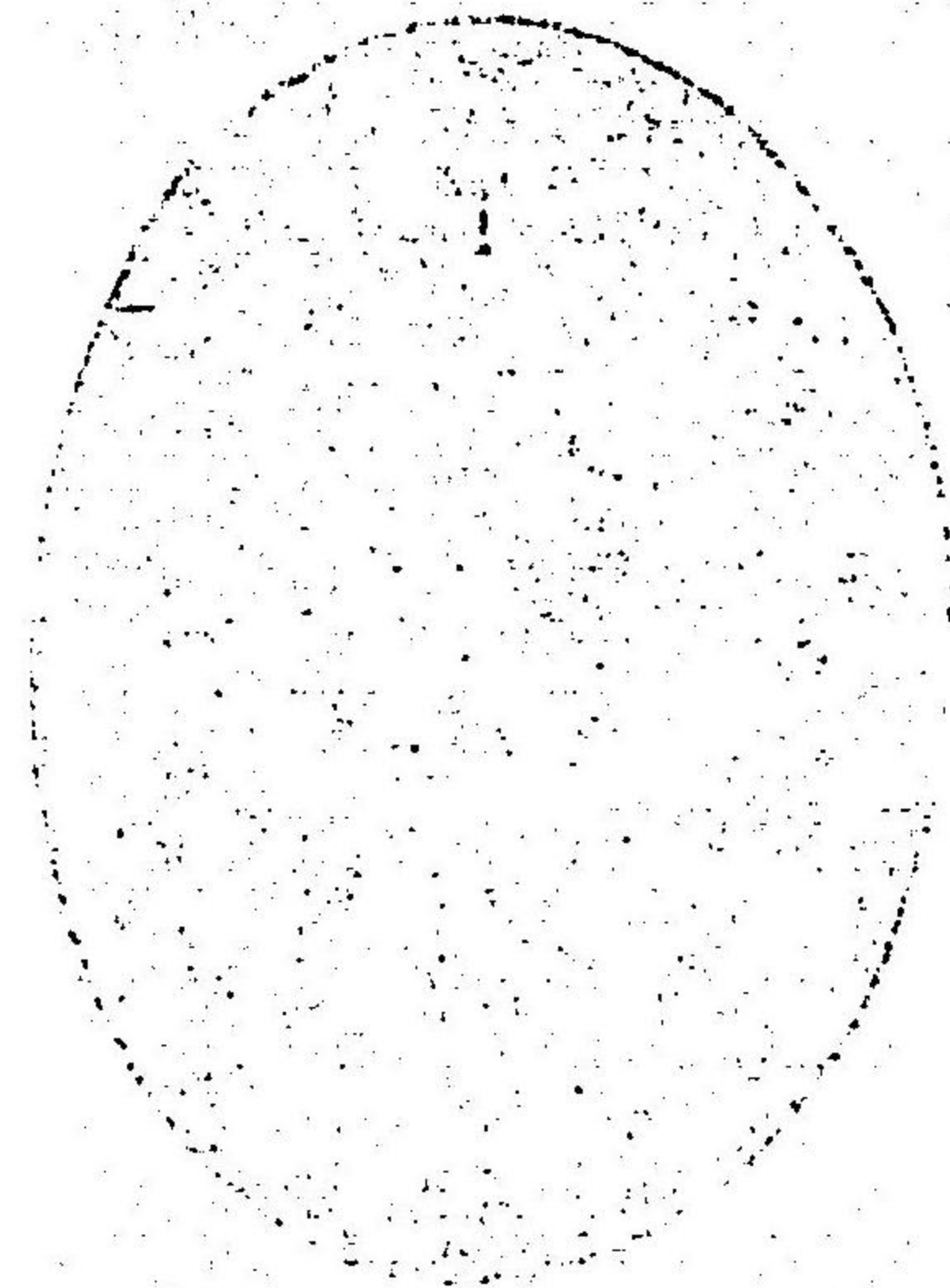
有田病院長  
醫學士 嶋津 眞君

和歌山縣有田郡心淺町

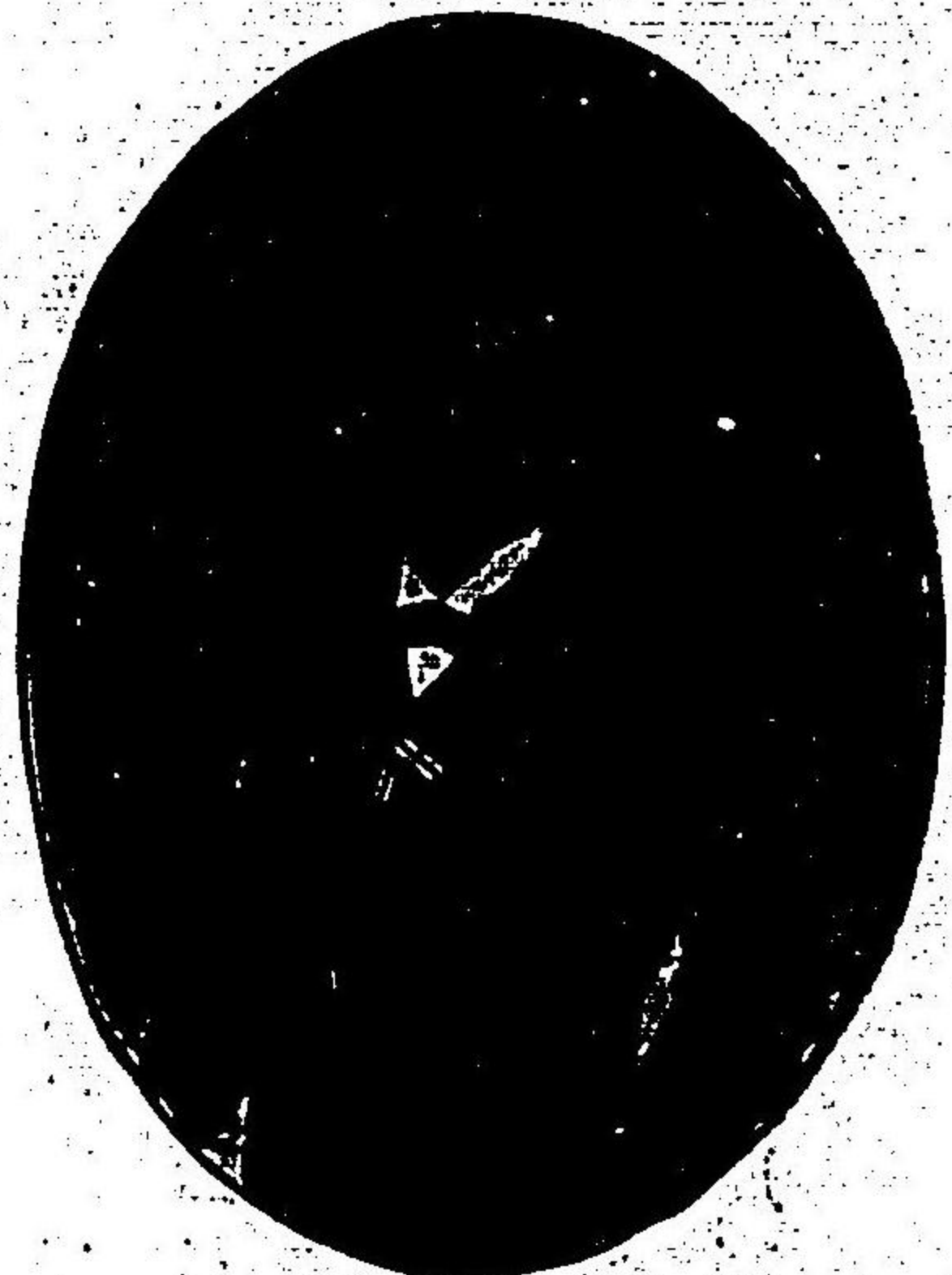
君は越後の人なり、資性剛直にして堅忍不拔、事に當りて仆れて後己むの慨あり、しかも人と交はるに城府を設けず、磊落の氣ありて知人間に重せらる、由來北越の人士は堅忍の性に富むと雖も往々進取の氣を欠くことなしとせざるに、君は其北越的氣性に加ふるに敢爲の氣を以てし、百挫不折、天職の爲めに研鑽を重ねつゝあるは甚だ多とすべし。

君幼にして逸才、神童を以て稱せらる、長するに及んで、小學校を卒へ中學高等學校の課を卒へて、京都醫科大學に入りて、研究年あり明治四十年を以て醫學士となる、君も笠原醫學博士門下の俊髦なり。

林田増太郎君の略歴  
君は奈良縣の人、先考は大和、田原候の藩士たり、剛直を以て鳴る、君  
明治八年四月其峻嚴なる家庭に生る、幼にして秀才四隣皆な、君の英敏を  
賞せざるはなしと云ふ、君長するに及んで奈良縣立中學、及び郡山中學校  
に學び、後ち大阪東雲中學校に入りて、中學校程度の諸學科を卒へ、其年  
度を東京に負ひ又神田中學校に入りて英語、漢學、數學を研學す、又去つ  
て慶應義塾に遊び、君當時既に刀圭の術に志ありて、一日の半を割きて濟  
世學舎に醫學の研鑽をなすこと年あり、遂に明治廿五年十月を以て東京に  
於て醫術開業試験に應じて前期學科を卒へたり。



林田増太郎君  
齒科醫士



齒科醫士

林田増太郎君

大阪市南區末吉橋東詰

君は奈良縣の人、先考は大和、田原候の藩士たり、剛直を以て鳴る、君  
明治八年四月其峻嚴なる家庭に生る、幼にして秀才四隣皆な、君の英敏を  
賞せざるはなしと云ふ、君長するに及んで奈良縣立中學、及び郡山中學校  
に學び、後ち大阪東雲中學校に入りて、中學校程度の諸學科を卒へ、其年  
度を東京に負ひ又神田中學校に入りて英語、漢學、數學を研學す、又去つ  
て慶應義塾に遊び、君當時既に刀圭の術に志ありて、一日の半を割きて濟  
世學舎に醫學の研鑽をなすこと年あり、遂に明治廿五年十月を以て東京に  
於て醫術開業試験に應じて前期學科を卒へたり。



君又中途にして家事の止むなきの事情に遭遇して、志を轉して齒科醫術の研究をなし、明治二十六年十月齒科醫術開業試験に登第す、爾來滋賀縣に遊ひ滋賀縣衛生會委員となり公共的方面に盡瘁したり、明治二十九年現地に一戸を構へ帷を下すや其勢力隆乎として大阪齒科醫中の花形なりき、君資性卓落不羈、辯論に長ず時に縱横に試むるや、古端風生の慨あり、事に臨んで、漢乎として犯すべからざるものあり、權勢に恃まず富貴に淫せず、昂々然として其所信と理想を行ふて憚からず、吾人の最も君の推服する所は毫も名利に戀々たらざる所なり、滔々時流に超越せる高潔の心事は、古來より惡歴史を有する齒科醫中に於ける萬綠叢中の紅一點とも稱すべきか、又君は自信の念に強く、其信念の實行に甚だ銳意なる、往々時人の惡感を買ふが如きも、君の心情固く光風霽月に似たり、毀譽何かあらん眞に毅然たる男子の眞骨頭を有すと云ふべし、是れ慥かに武士的精神に鍛成せられたる祖先の人格と性行を認承したる所以ならん、然れども近時頗る老成の風ありて、重厚寛容、凡て沈黙を守りつゝあるに似たり。

君は氣骨稜々たる側面に於て又緻密周到の用意を失はず、君嘗つて三十七八年役起るや、召されて托するに口腔衛生の事を以てせらる、君其任に有るや戰地後送患者の治療數は無慮壹萬三千餘人なりしと云ふ其病症の數理的に統計を作り斯界に貢獻したる處尠しとせず、就中脚氣病と齒齦炎の關係を研究して之れを世に公けにしたり、尙君今研究中に有るも其統計が如何に推理的成りしかは、君が放言壯語の人に非ずして、其蘊蓄の淺からざる學究的人たるを知るに足らんか。

君は漢文學の造詣も淺からず、近時齒科新報なるものを發行し、自から筆を執りて、醫弊多き斯界に向て直言直筆警醒を加へつゝあり、黄金是れ貴しとする大阪醫界にありて、氣格夫れ君の如く高きは、眞に少しとすべし、君も亦た斯界の英物なる哉。

（Faint vertical text, likely bleed-through or very light printing on the reverse side of the page. The text is mostly illegible due to fading and high contrast of the scan.)



醫師 永田一馬君

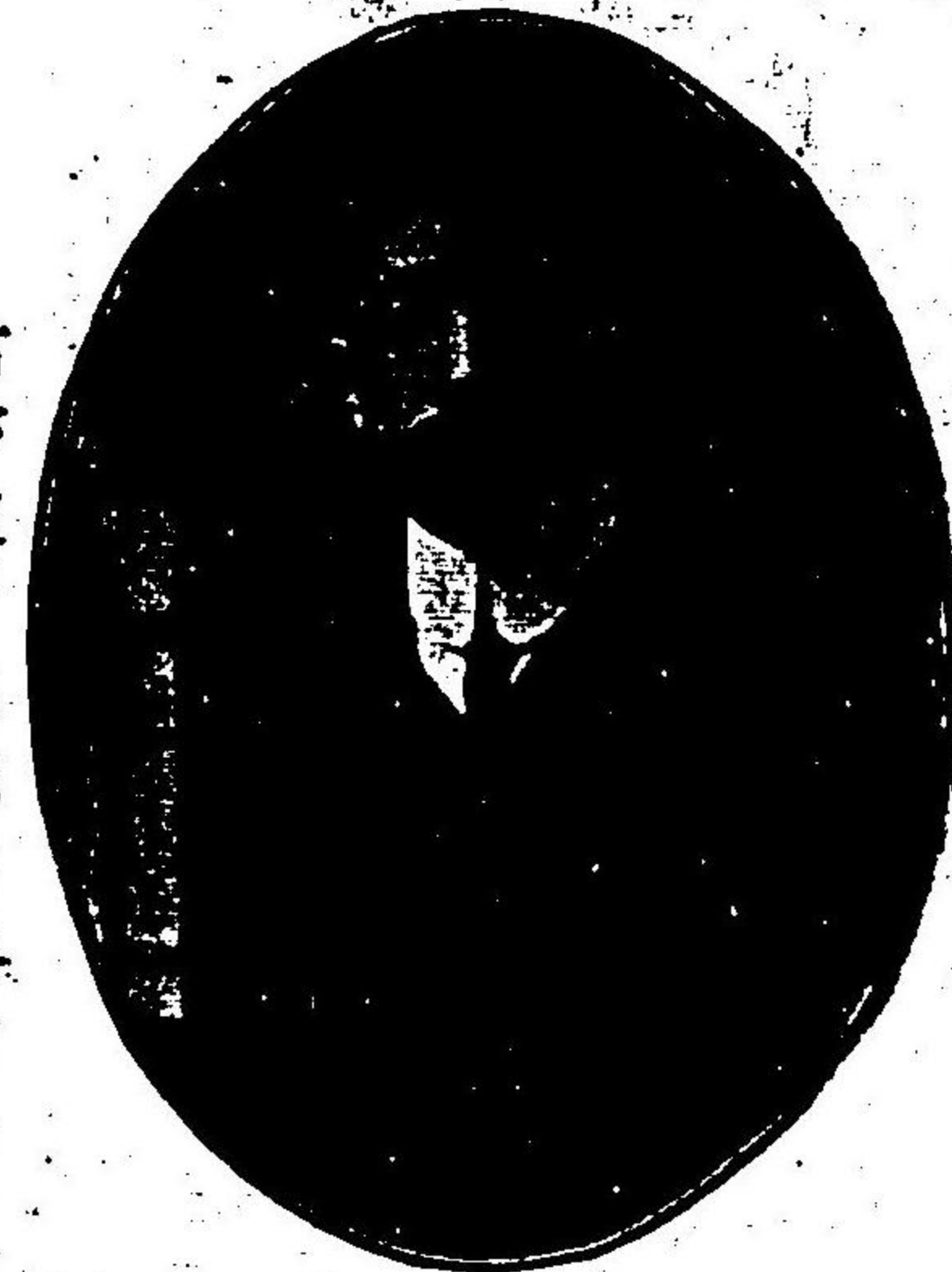
京都府久世郡平川村久津川

君が先考は永田周恭翁と稱す。

家世々醫を業とす、君は實に永田家五代の主なり、幼より逸才あり出でて  
醫を學ひ傍ら經學、文章に志す、後京都に趣き遍ねく時師を參攻し、十三  
歳にして新宮涼園先生の門に遊ぶ、日夜切磋琢磨大に多大の獲物を積み重  
ねて醫道大に進む、二十五歳にして某病院に職を奉じて、實地の研鑽を成  
すこと年あり後郷里に歸りて業を開くや、藥を施し患を救ひ、親切懇到  
貧賤を賑はし、遺勞を厭はず、凡そ痼疾異病にして他醫の癒し能はざるも  
の、遠近昇載争ふて治を請ふ、履履常に門に充つ、其弟子を指導するや淳

々として醫道を説きて倦色なく、其眞理を會得するに非らざれば止まざりしと云ふ、常に精神修養の第一義なるを教へ、徳義禮節の重すべきを唱道し、苟も道に違ふ者あれば鞭撻毫も假借せず、茲に於てか名國手の名四方に喧しかりしと傳へらる。

君人と爲り、卓落不羈、剛直にして事を賭る風生、敢言面質、豪も顧避する所なし、然も頗る雅藻に富む、晩年益々君の名又籍甚たり、君が識見の高、道念の幽、亦た以て眞個に國手の名空しからずと謂つ可し。



陸軍三等軍醫  
正 八 位

### 藤原立道君

和歌山縣有田郡箕島町

君が家、根來の榮僧小密茶の直系道竹に出づ、小密茶の信長に追はるゝや、道竹武藏に走り、風雲を捉へて爲すあらむとし、後ち紀州に歸りて、有田郡宮原を名位の地と爲し里俗之を關東屋敷と稱して敬仰措かず、實に藤原家の祖なり。

君か父道悦氏、醫を業とし、箕島に居を移す、是れ君をして醫界の人たらしむるの素因を作りしものにして、君明治十四年四月箕島に生る、長して英敏、好むて政史を讀む、明治二十八年和歌山縣立德義中學校に入り、後和歌山中學校に轉ず、三十二年九月大阪府立高等醫學學校豫科に入り専心

一意研究に随ふ、三十八年二月陸軍衛生部大阪府立高等醫學校信託生を命  
せらる、同十月高等醫學校の業を卒へ、間もなく見習士官となり、歩兵第  
三十七聯隊補充大隊に配せらる、翌年三月三等軍醫に任せられ、三十七聯  
隊附を命せらる、次に正八位に叙せられ、臨時測圖部附となり、更に工兵  
第十大隊、姫路衛戍病院附等に轉せしむ、四十年九月病によりて退役し、  
現下の地に業を開けり、爾來地方喧傳、直ちに在郷軍人會箕島分會長、有  
田郡醫師會幹事、箕島町會議員等に推さる。

君資性剛健にして任侠の風あり、其町會議員となりての後は、國民黨に  
籍を置き、政友會の淵叢を以て目せる、地に歸りて、政戦克く努めつゝ  
あり、風平清楚、意氣活達、好むで談論し、且つ詞章に巧みに、又た俳を  
能くす、會て播の本我邦老宗匠より、文臺を許され、現に其相讀者なり、  
俳名を播里といふ、紫浪庵宗匠は前號なり、閑會に同心を結合し、十葉俳  
壇なる一社を組織し、俳諧雜誌「彩虹」を發刊し振器に盡せるが、俳味を嘗  
むるの外又た書畫、刀劍を愛し、珍藏少なからすと云ふ。

君は高醫在學中、運動家の撰良として常に陳頭に立ち、君がものしたる  
校歌は、傳つて尙ほ母校の光明を輝かしつゝなり、而も君の運動癖は尙ほ  
過ぎず、或は愛馬に乗じて郊外に遊び、或は獵銃を伴に深山を渉る、此の  
豪傑は、彼の詩興と相和して、そゝる人物を思はしむるものなくんばあら  
ず、何ぞ夫れ多藝多能なる、何ぞ夫れ多趣多様なる、近什二三を左に。

雪なれや千石船の七五三飾

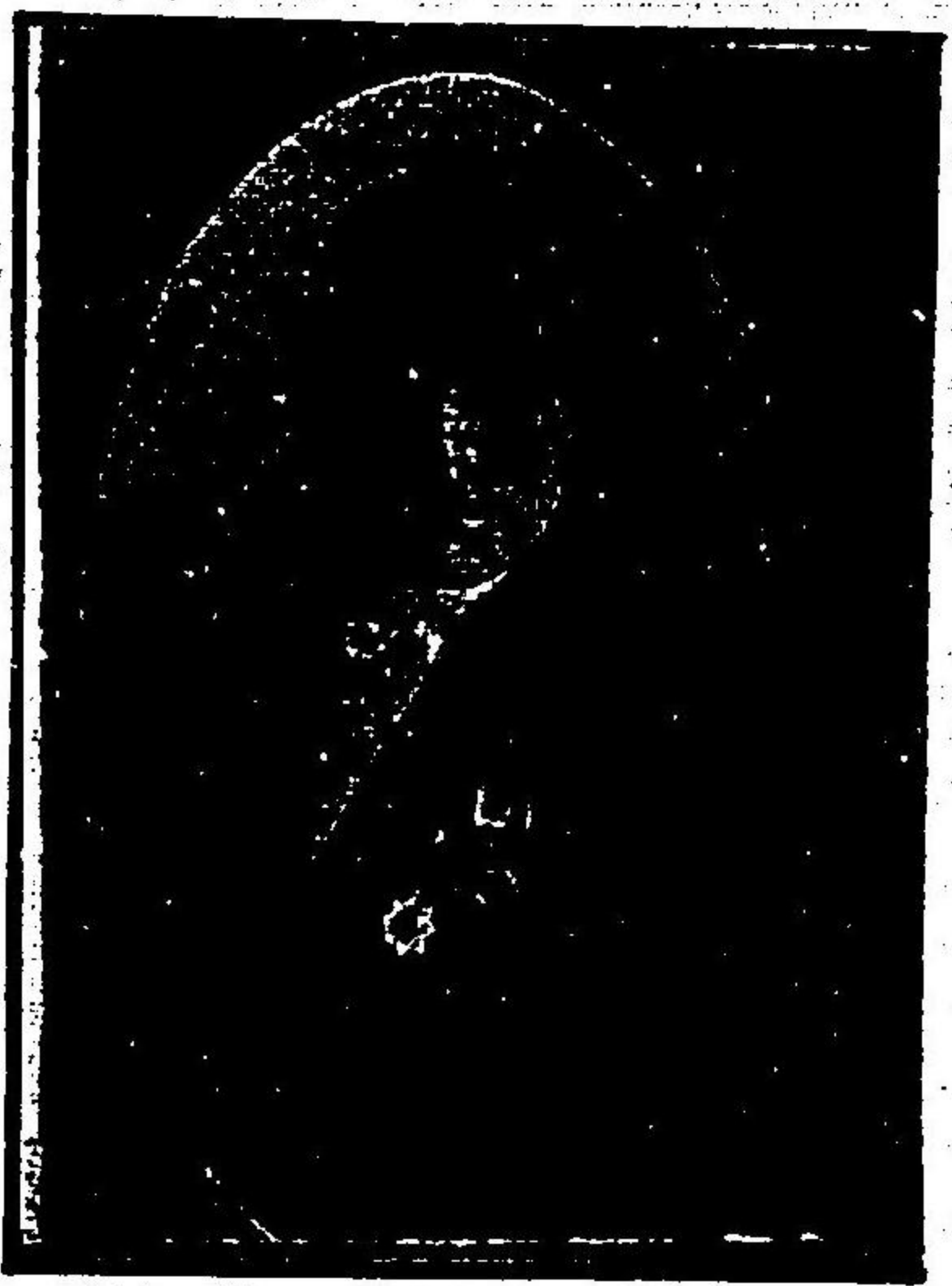
手拍子に熊や愕かす春の雨

背水の陣をかまへて夏の月

爽を秘する味方の陣や秋の雨

人を呪ふ女に逢ひぬ冬の月

按摩獨り廓の背を時雨けり



豫備陸軍三等軍醫  
正八位勳六等

舩松倉太郎君

大阪市南區雜波元町

資性剛直にして堅忍不拔、事に當りては仆れて後已むの概を有す、しかも人に交はるに溝渠を設けず、磊々落落、一片の奇節、瀟乎として反すべからざるものありて、知人の間に甚だ重せらるゝもの、是れを我舩松倉太郎君となす。

君は攝津國墨の江の人なり、明治五年一月一日を以て生る。

君幼にして京都府愛宕郡滯市村小學校に學び、弱冠にして大阪府立醫學校に入る學ぶこと二年、後事故によりて去つて、東京醫學專門學校濟世學舎に轉じて日夜切磋研學すること三年あり、遂に明治三十年十月醫術開業

試験に登第して大阪に歸り、三十一年より三十三年まで大阪府監獄醫を拜命じ、三十三年大阪府検査委員及検査官を拜命す明治三十七八年日露の戦役の起るや、君は召されて三十八年九月豫備見習醫官を命せらる三十九年一月陸軍三等軍醫に任せられ正八位に叙せらる、同年戦地に出帥を命せられて、滿洲の野に赴任し軍事衛生に盡瘁すること多大なりしと云ふ、其功によりて四十年四月勳六等旭日章を賜ふ、爾來現地に門戸を張る君の名聲隆々として四方に馳す、君又工場衛生に盡瘁すること少なからず其附近にある多くの工業會社は君に托するに工場衛生の監督を以せりし。

君は意思の人にして、天稟の英才に加ふるに婉轉融通の社交家なり、且つ君が理想としては、近時醫人の道義の頹敗を嘆じ、醫家道德思想の涵養と品性の向上を圖るにありと何ぞ其心事の高潔なる光風霽月の淡懷歎すべし、其尋常醫流に非らざるを付度するに難からず、君も亦大阪醫界の一異材と云ふべし。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

ドクトル  
メサチーネ

### 淵田俊治君

大阪市東區並町井池角

君は大阪府下東成郡に生れ、稍長じて岡山醫學專門學校に入る、當時同窓中の俊才たり、明治三十六年同校を卒業し、直に桂田博士の助手となりて三十九年八月に至る。

三十九年八月大志を抱いて渡歐、ミュンヘン大學に遊ぶ、當時君の最も得意とするところは語學にして、在歐友人間に冠絶せりと稱せらる、居ること一年、ドクトル試験に應じて首尾克く合格、是れより婦人科の大家ウングル氏に就て其一學期を終へ、次にバウソンドル氏に就て小兒科の一學期を終へ、更にレーデライン氏に就て婦人科の一學期を修得、此間専心一意

斯道の研鑽を怠らず、大に得るところありたり。  
四十年六月ミューンヘンを去てサクセン洲のドレスデン病院に赴き、レオ  
ホルト氏に従ふて産科を復習し、同年十一月埃國維納府に赴きて、ロスト  
ホルム氏の婦人科教座を叩き、同暫らく笈を留めて同科攻究の傍ら、ヘー  
ルホ氏に就て花柳病學を學び、同時にフリッソニ氏に就て女子泌尿器科の  
研鑽を遂げ、四十三年七月より全歐洲巡遊の途に上り、同年十月多大の蘊  
蓄を齎して歸朝、乃ほち現在の場所に壯大なる門戸を張れり。

君仁俠にして信義を重んじ能く弱者を憐む、既に此一事を以てするも、  
醫術の素養と相待て名を杏林に馳するに足る、況んや學殖凡を超へて深遠  
なるに於てをや、開業後日尙ほ淺しと雖、其深き造詣と歐洲最新式の設備  
と、天京の俠骨とは、早くも社會の注目を惹き、新進氣鋭の醫家として、  
其名既に婦人科醫界に鏘々たるものあるに至る。  
君は醫術の外言論に長じ、人と談するや事理明晰、能く對者をして其説  
に服せしむ、前途醫界に貢獻する事蓋し必ず多大ならん。



齒科醫士 堀内 徹君

京都市烏丸通御池下

頭腦明晰、學識深大之れに加へて品藻の清純なるもの、唯だ夫れ縱かに  
堀内徹君を算するに足るべき乎。

君資性、沈着壯重にして謙讓に富み、寡る學壇の人として適するを見る  
君亦一身を研學の爲めに捧げて倦まず、當世齒科醫界中にありて最も諒な  
るものといふべし、其後進の子弟に對するや、甚だ懇切を極め、且其人格  
態度、自ら欽慕の念を禁じ能はざらむるなり。

京都齒科醫界渡邊晋立君逝きて後に三明星の尙存するのみ、曰く森田駒  
二郎君、曰く堀内徹君即ち是れ、君は懿達にして機智才略に富むの人、一

は入格高正にして品藻亦甚だ純なるの人たり。  
近時齒科醫界の腐敗を傳ふるものあり、我國古今齒科界の状態を對比すれば、其學術的方面に於てこそ、古への今に若かざれば、其道德方面に於ては、猶ほ依然として、古來の惡歴史に由りて魁せられたる、香具師に等しき一派の手によりて、可憐なる天下幾百萬の患者は翻弄せられざるべからざる運命にてありき、况んや、或る者は他の勢力を疾みて之れを陥れんと圖り、或る者は同黨伐異を事として利唯是れ争ふなど、一種嫌厭すべき混沌たる弊害の存するあり、此くの如き俗情野趣の中にありて、君は獨り昂々然たり簡々乎たり、嗚呼誰か克く靈的心念を有するものにあらざれば、克く爲し能はざるべし、吾人の敬服して措かざるところ、實に此一事にあり、蓋し君の如きは今の齒科界に於ける一清士たるを失はざるもの乎、吾人は君の前途の天寵愈々厚からむことを祈る者也。



醫學士 渡邊純一郎君

滋賀縣大津市四宮町

明治八年四月を以て福岡縣築上郡葛城村大字越路に生る。家は世々小笠原藩の祿を食む、地方の名門也、明治二十八年七月福岡縣立豊津尋常中學校を卒業、同年九月熊本縣第五高等中學第三部に入學、三十年七月同校を卒へ、翌年七月帝國醫科大學東京醫科大學に入り、三十五年十二月卒業して醫學士の稱號を得たり。

三十六年二月帝國醫科大學東京醫科大學副助手を囑托せられ、同年九月助手に任せられ、附屬醫院勤務となる、翌三十七年一月職を辭して大津に來り、公立大津病院副院長に任せられ、今尙ほ其職にあり、尙ほ三十七年



四月日本赤十字社滋賀縣支部病院外科醫長となり、三十八年八月より四十二年十二月まで其眼科醫長を兼ね、又四十二年十月より四十二年八月まで産婆試験委員たりし経歴あり。資性沈着にして壯重、謙讓の徳に富む、朴訥真摯にして毫も虚飾なく、一見學者風の紳士なり、君は獨り其風采態度が學究の人たる事を表する而已ならず、其實質に於ても亦稀に見る篤學家にして、一身を研究の爲めに捧げて倦まざる概あり、殊に其頭腦の明晰なる、又其精力の卓絶せる、一本調子にして外物に心を奪はれざる、何れか研學に適せる好資格ならざらん、故を以て學殖甚だ深く、實に滋賀縣醫界に於ける重鎮たるに足るものあり、嗚呼興世滔々として時流に媚び、虚飾只是れ事とするの今日、遇ま君の如き大人格の存するは、啻に醫界の爲め而已ならず洵に社會の一異彩として噴稱すべきなり、君の嗜好は插花、書畫、玉突等にあり、年齢尙ほ壯、好丈夫希ば加餐して大成を期せよ。



醫學得業士

田中太一郎君

大阪府中河内郡八尾町

君は河内國八尾町の人なり、幼にして小、中學校の學課を郷里に卒へ、後醫に志して大阪府立醫學校に入り同校を卒業して、郷里に歸りて業を開く君の特長たる内科、小兒科の治療に従事するや、勤勉真摯にして、熱心且つ親切に治術を講じて餘念なく、爲に門前診を乞ふもの續々接するに至る是れ蓋し君の人格と手腕との致す所にして、郡中一の流行兒と稱せらる君俊才にして研學に篤し、其中學時代より既に優等の成績を以て一貫したりと云ふ一事を以てしても一斑を知るに足るべく、君が品行方正にして君士人の風あり。

和歌山縣有田郡湯淺町  
有田郡醫師會長  
吉村英徹君  
君は舊和歌山藩老菅沼半兵衛氏の次男にして、十七歳の時出で、吉村家を襲げり、嘉永五年七月を以て生る。曾て其の友桃井鐵太郎氏と相酌み、談處世の術に至り、醫道の經世に志あるものゝ執るべき最も重要な所以を聞きて深く感じ、爾來之に志すに至りたりと云ふ、京都療病院に學び、又た北島道龍師に就て獨逸語を專修し、明治十四年を以て湯淺町那耆病院を長となり、爾來赤十字社委員、地方衛生委員等となり、其手腕と相待ちて徳望日に加はる觀ありき。君亦た單に刀圭の術に安んぜず、夙に政壇の人なりき、代議士候補者た



有田郡醫師會長  
醫師 吉村英徹君

和歌山縣有田郡湯淺町

君は舊和歌山藩老菅沼半兵衛氏の次男にして、十七歳の時出で、吉村家を襲げり、嘉永五年七月を以て生る。

曾て其の友桃井鐵太郎氏と相酌み、談處世の術に至り、醫道の經世に志あるものゝ執るべき最も重要な所以を聞きて深く感じ、爾來之に志すに至りたりと云ふ、京都療病院に學び、又た北島道龍師に就て獨逸語を專修し、明治十四年を以て湯淺町那耆病院を長となり、爾來赤十字社委員、地方衛生委員等となり、其手腕と相待ちて徳望日に加はる觀ありき。君亦た單に刀圭の術に安んぜず、夙に政壇の人なりき、代議士候補者た

ること兩三回、遂に失敗を重ねるに過ぎざるも、元と是れ同黨異伐の弊に出で、政友會員たらざるものは政黨員にあらずと思維せらるゝ同地方にありて卓然其膝を屈せざる意氣が却て災せるのみ、されど二十六年遂に月桂冠を戴き中立派の名士として瞻仰せられつゝありき偶々同志河野廣中氏の上奏案出で議會は解散の不幸を見たるも君の國士としての名は依然として存せり。

那者病院は、一私立病院たるも、繼續三十年、醫界の名士と稱せらるゝ某博士等も、君の門下に出でたり、會てベスト發見者として、郡有志より金杯の賜與を受けたることあり。

君文藻に富み、詩を善くす、又た劍道柔道に入り、丹精の技に巧みなり、會て伊藤公を吊ふの一律あり。

東海老龍斃湖原

訃音悲報動乾坤

維私偉業安中國

振古大勳扶蜜滿



醫學博士

### 郭 嘉四郎君

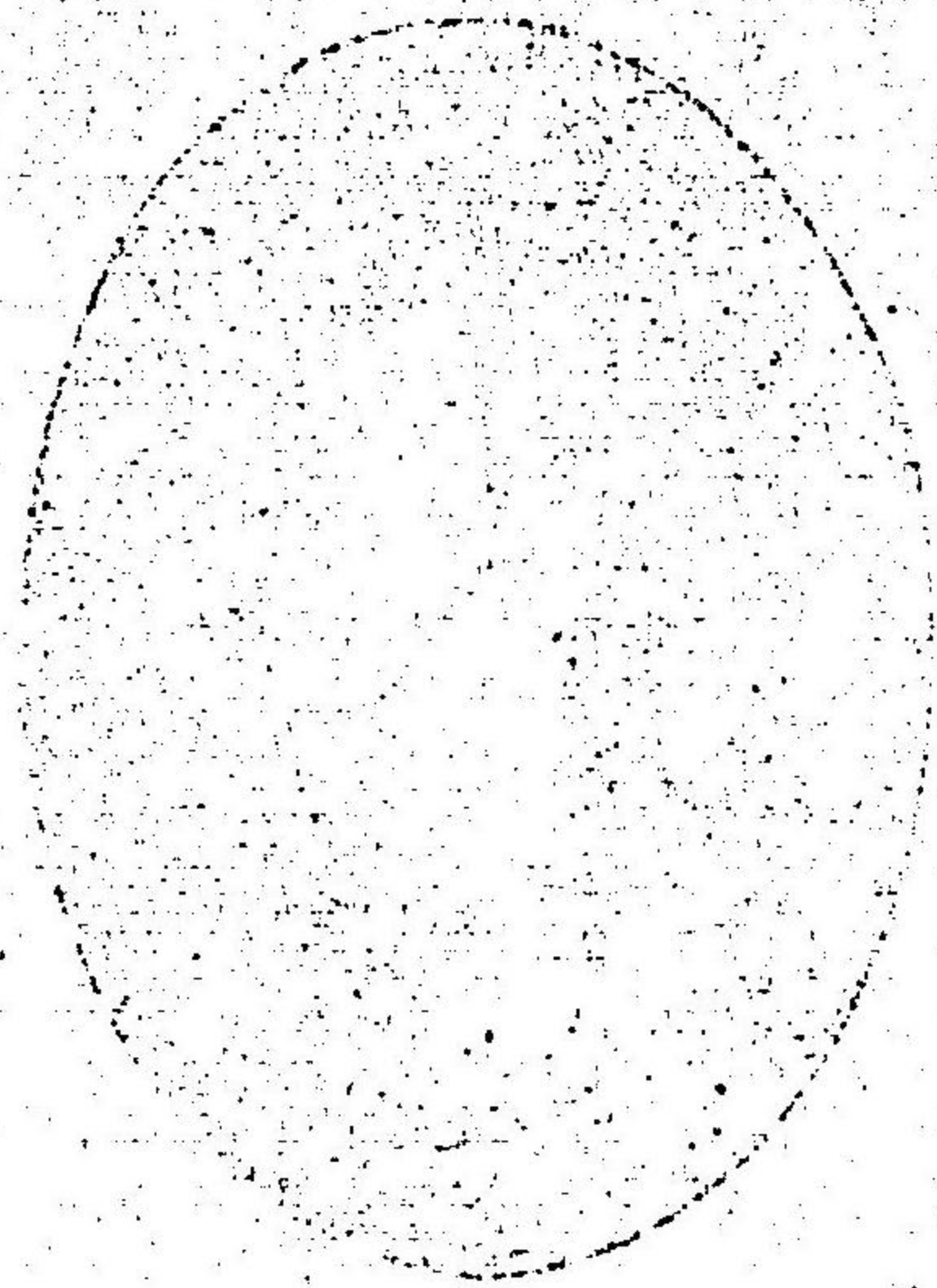
和歌山縣海草郡  
澁町大字今福

郭家の祖は明末志士の亂を逃れて移住せるに出づ、其三代目より和歌山に來り住して醫を營む、家系最も古しと云ふべし。

當主嘉四郎氏は和歌山の名門、丸山家の出にして、安政六年に生る、十一歳にして郭家を襲ぎ、漢籍を藩儒兩角實氏に就て修め、明治十二年二十歳にして、和歌山縣立醫學校の業を卒へたり、而して直ちに上京佐藤尙仲氏の門に遊び止まる三年、更に東京醫科大學撰科に轉じ其業を了ふ、實に第二回目の卒業生なりとす。君資性温良、學殖深遠を以て儕輩に重せらる、特に清廉潔白なると、人

格の崇高なるに於て、最も聞ゆるの人にして、加ふるに精氣旺盛非凡を以て聞ゆ、蓋其人望に於ても、亦た手腕に於ても縣下稀に觀るの人たらずんばあらず、國風に長す、忙中吟懷、閑日月自ら其中にあり近詠たる。

たかすめるいらかなるら舞吹上の  
やなきにうかふ望月の影



醫學得業士

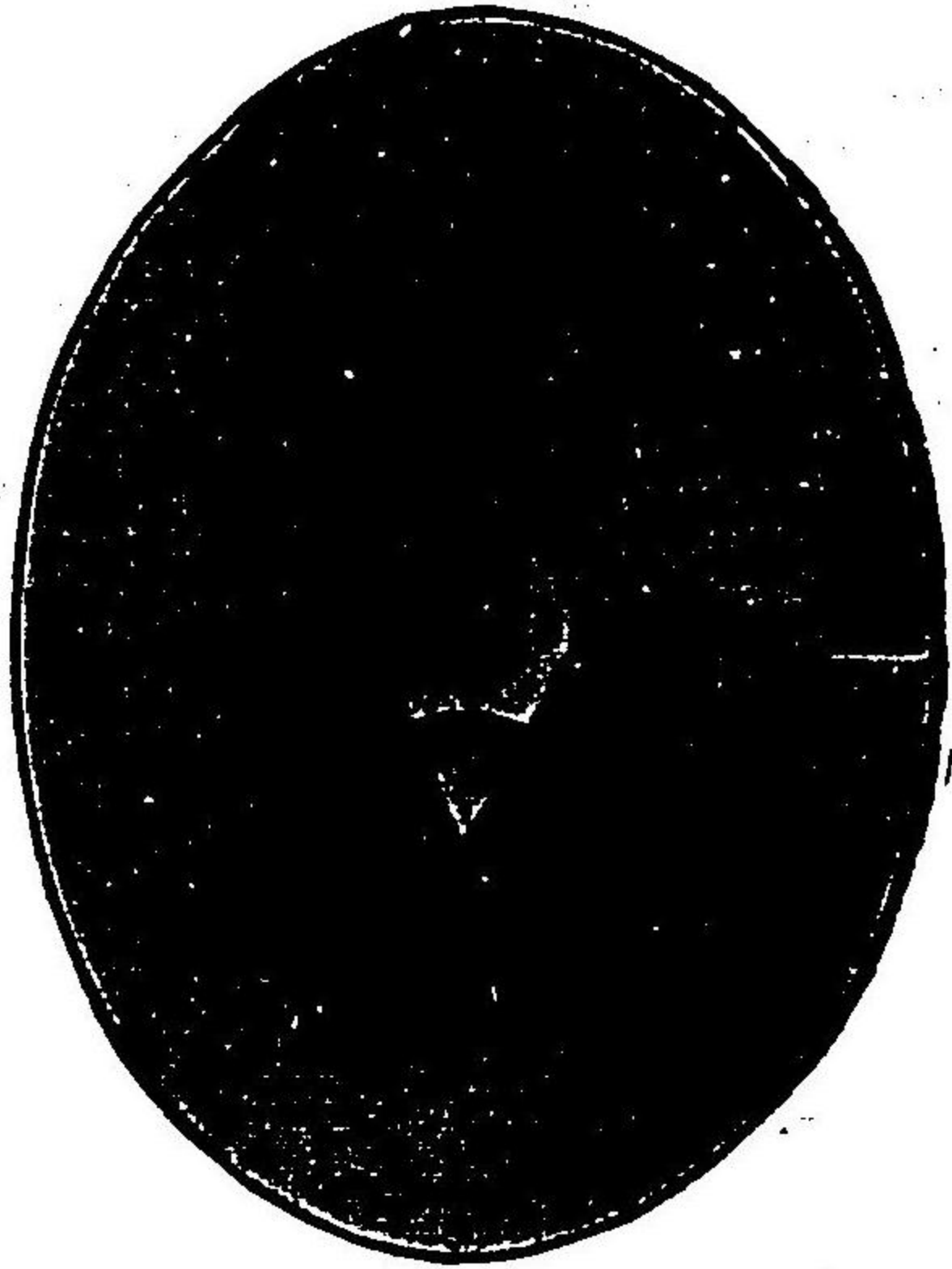
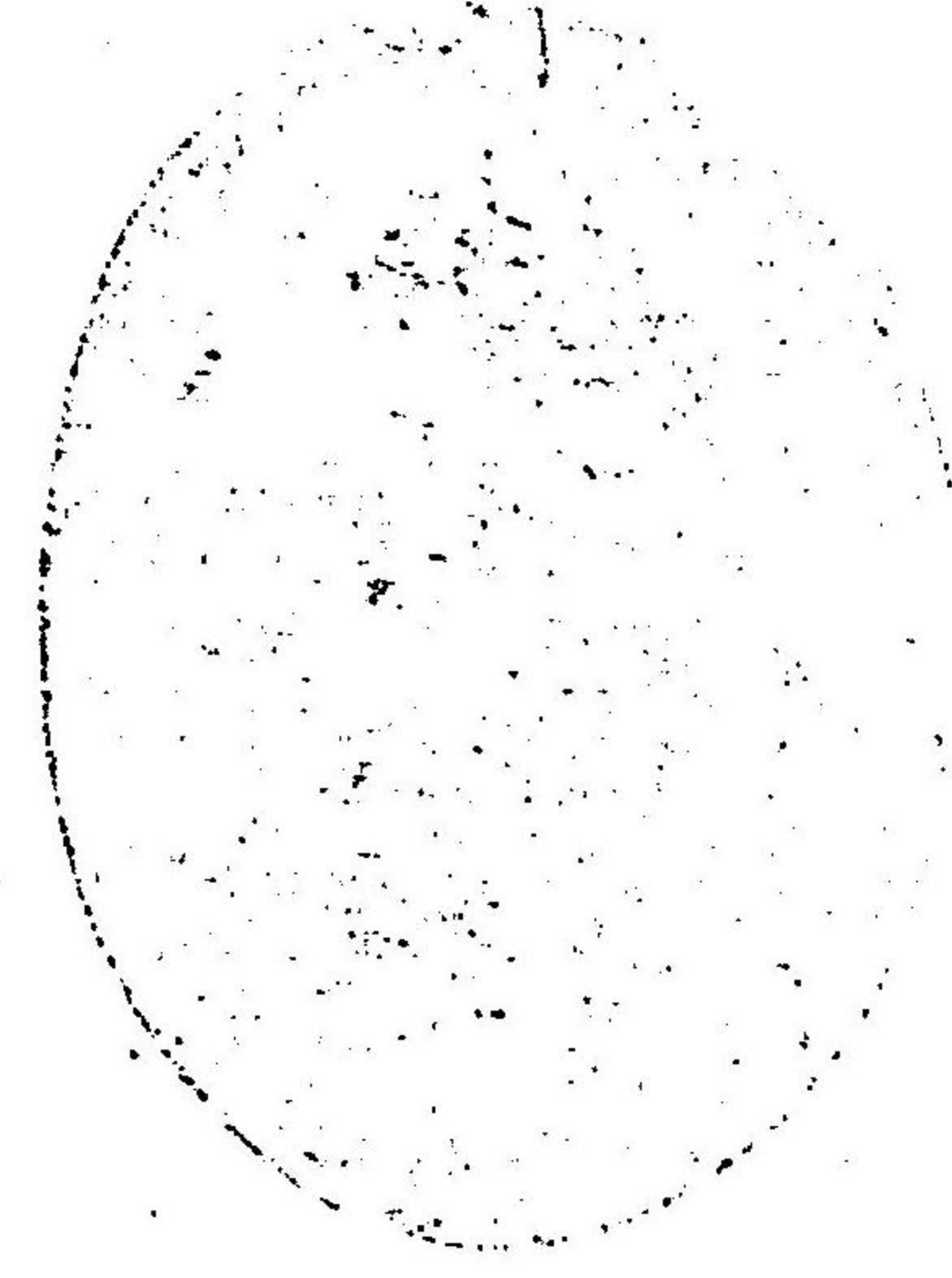
品川 玄一 君

和歌山縣海草郡  
箕村字阪井

君が家累世農を以て業として、家祖より十七世の久しく連綿たる、地方の名門なり、君が先考は濱喜左衛門と稱し硬直なる、人として推重せらる會つて村、郡會議員として地方自治の爲に盡しつゝありと云ふ、君は明治十五年七月を以て郷里和歌山縣日高郡白崎村に生る、三十年出てて現地の品川氏を嗣ぐ、品川家は舊日高郡丸山村小松原城主湯川氏の末裔なり、落城の後阪井に逃れ品川氏と改稱し醫を業とす。

君は和歌山縣海草郡の人なり、明治四十年を以て、大阪高等醫學校を卒業しぬ、其在學中に於ける君の刻苦精勵は恒に優秀の成績を擧げ、同窓列

學の仰望の的たりしと云ふ、後内科小兒科を高洲博士に師事して、大阪病院の助手となりて研鑽する年あり、郷に歸り來つて現地に一戸を構へて帷を下す、君未だ春秋尙淺きも新進氣鋭め篤學者にして君が長所とするところは、謂ふまでもなく、内科、小兒科にして、其の純朴にして些の街華の風氣あるなく、克く務に忠實に孜々として倦色を見ざる態度と性格は、當代新進醫家の洵に罕とする所なり。



岡山縣都窪郡醫師會幹事  
醫學得業士  
脇 本 正 夫 君

岡山縣都窪郡倉敷町

君は明治九年九月を以て、備中國吉備郡淺尾村大字福井に生る、本姓を白井氏と稱し、世々地方の豪族にして、君が先考までは庄屋格たり、君出で、都窪郡清治村大字輕部の名門、脇本氏を嗣ぐ、君効にして醫に志し明治十九年關西中學校を卒へ、其年第三高等學校醫學部に入る、三十三年卒業す、爾來神戸市、佐野病院、吉田病院、福岡縣立病院等に助手となりて實地の研鑽をなすこと年あり、三十七年四月現地に來つて門を開く來り診を乞ふもの踵を接して至る、内科外科は君の長所なり、君が學蹟の優秀なる、當時同窓間に於て畏敬措かざりしところなりしと云ふ。

君、資性沈黙寡言にして學殖深く、且つ漢文學の造詣も淺からず、天稟の才を有し、頭腦明晰にして果斷に富む、又た特に患者に接するに懇切を以て稱せらる、實に岡山縣の一俊才として傳へらる。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫學畢業士

矢野龍雄君

和歌山縣海草郡菟濱村

君は和歌山縣郡賀郡調目村の人なり、幼にして伶俐、秀才を以て聞ゆ、郷里小學校に學び、後和歌山中學校を卒へ、進んで岡山醫學專門學校に入り、研學の功を了へて、明治四十三年十月最秀成績を以て、醫學全科を卒へたり。

君意志堅實、普通凡俗の得て及ぶ可からざるものあり、而も温厚にして謹肅、開業日尙ほ淺きも前途多望の新進氣鋭の醫家として目せらる、君の技能に至りては、多年の蘊蓄を傾注して最も細密の用意を失はず、就中内科、小兒科は君の獨特擅場を以て許さる所、尙ほ甚だ春秋に富むを以て、

前途の進境夫れ期して待つべき乎。



醫學得業士

### 野井清廉君

京都府喜綴郡  
郡々城村字岩田

君が家累世農を以て業とす、君は明治七年十月を以て生る、幼にして小、  
中學の課程を卒へ、長するに及んで、京都獨乙學校に入り、獨乙語學を修  
む、後ち、京都府立醫學校に進み、明治二十七年優等の成績を以て醫學全  
科を修學す、翌年、東京醫科大學國家醫學科に入りて専攻し業を卒るや、神  
戸市に來つて神戸病院に入りて其助手となる、幾許もなくして之れを辞し  
現地に歸りて業を開く、其患者に向つて頗る鄭重懇切なると、君が内科の  
技能の衆に優ぐれて信頼すべきものとあるに因り、門前常に患者を以て満  
たされ、其勢隆乎として地方開業醫中に冠たり、君又小成に安ずるの人に

非らずして日進の醫學の研鑽に餘念なく、常に京都醫科大學の講習の開か  
るゝや、忙中閑を割きて熱心に參加して、先輩の學說に傾聴せりと聞く。  
爲人沈重にして寛容、大家の風ありて、頭腦の明晰と篤學とを以て知ら  
る、平生寡言なるも、談一度び専門の事項に及ばんか説いて倦むところを  
知らず、蘊蓄の大、常に同儕間に推さる、君尙ほ春秋に富む君の爲めに甚  
だ慶すべし、又た書畫の趣味に富み且つ鑑識の明を有す、其氣格と風懷尙  
ほ察すべきなり、君亦た京都府杏林界の一人物とすべし。



齒科醫士 轟 三次郎君

大阪府堺市

君が家嚴泰山翁は豊前下毛郡蜷瀬新町の人なり、硬直清廉を以て聞へ、  
産科の達人として其名遠近に鳴る、五十歳にして逝く、君は其家庭に生る  
時に文久二年六月なり、幼にして悟穎、讀書を好み、家庭に學び、弱冠にし  
て笈を負ふて大阪に來り、齒科學の研鑽をなす、當時齒科醫學は幼稚にし  
て参考書の需むべきなく、君は拮据黽勉、多大の勢力によりて苦學數年、  
遂に明治十八年九月内務省齒科開業試験に卒業す、二十一年堺市に來つて  
開業す、君は既に齒科界の品流の向上促進を期圖すと聞く。  
爲人温厚にして堅實、手腕また尋常一様の齒科醫の比にあらず、特に多



とすべきは能く後進の誘掖に努むるにあり、君の部下にして篤學に且つ成績優良なるものには資を給して、勉學せしめ、又た門戸を張らしめたるも、其の擧げて數ふべからず、君は人材の養成に熱心なること斯の如きもの、眞に斯界に稀れに見るところ、至徳と云ふべきか、君又た甚だ友誼を重じ、會て君の友人某、當地に開業するや、門戸甚だ振はず、君屢々訪ふて之を慰藉し、且つ之れが經營を助け、其の患者の來りて診を求むるもの、加はるを見ては、我事の如く喜びつゝありしとなん、其性格は此一事に現はれ眞に床しき限りと云ふべし。

君は謹嚴直正自ら持し、其技能の俊雋なる、當代齒科界に多く其比を見ざるも、君之れに關して毫も孤負することなし、其襟度の洒々たる、亦以て察すべし、一意患者を呼ぶことのみ力を致せる他の同業者に比すれば、門戸質素に過ぐるが如も、最も眞面目に天職を遵守し、一般患者に對して意盡し情悉し、未だ常に人の不平を聴くものなしと傳へらる、欣慕々々



醫學得業士

### 武田勝義君

兵庫縣川邊郡園田村  
内ノ富田村

明治八年一月を以て兵庫縣川邊郡園田村の内富田村に生る、君の遠祖は申斐の名將武田信玄にして、其孫勝親此地に來り、善念寺と稱する寺院を建立したりしより、世々相襲で其住職たりしが、後醫を以て其專業とするに至れり、現に地方の舊家として名聲四方に響きつゝあり。

明治十九年出でて大阪に學び、後轉じて愛知醫學校に入り、三十五年卒業して病院の醫員となり、三十六年二月開業免狀を受有し、翌年歸郷して門戸を張り、同月論文提出に依りて醫學得業士の稱號を得たり。

君の得意とするところは小兒消化器疾患にして、所謂腺病の治療なり、

毎年三四月より十月頃までは、附近各町村は勿論、遠く阪神方面より、其名聲を慕ふて來集し。其専門的施療を仰ぐもの絡驛たるは能く人の知るところなり。

君が公共に盡せし事績を舉れば、四十一年天然痘の流行に當り、君が担任にせる隔離患者に一名の死亡者なかりし事、同年西宮町より君の居村に持ち來りたるペスト患者の死体検案に依りて之を看破し幸に病毒の傳播を免れ得たる事、四十三年の虎疫流行に際し、大阪府郡部の虎疫流行二等地たりし原田村の病毒を散蔓せずして、悉く隔離病舎に收容し、而も其患者を総て全治せしめたる事等なり、而して君は現に有隣生命保險會社囑托醫

たり、又居村及近隣數村の學校醫として公共に盡しつゝあり。資性濃厚篤實にして、患者に對する頗ぶる親切、施療に當りて注意周到を極む、且つ君の最も美德とするところは其父母に孝順なる点にあり、故を以て郷黨は勿論、遠近同業者間の信望あり。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

### 横山 勇吉君

大阪府三島郡高槻町

君は高槻の人なり、家世々地方の資産家を以て聞ゆ、君又た郡中醫界の重鎮を以て知らる、君年少時代より才氣穎脱し、漢文學の造詣も淺からず、君爲人麗落にして圭角なく、溫良にして驕慢ならず、完全なる資質の中に犯す可からざる威嚴を備ふ、又患者に接して懇到真摯、一たび君の診を請ふものは、萬事を舉げて君に信頼するの風あり、且つ其社交術にも巧にして、八面玲瓏、何人をも悦服せしめ、又何人をも隔意なからしむ、口一たび啓けば時に、古端風生の慨あるも概して穩健にして微温的なり、特に君は自信の人にして自負の人に非ず、亦以て當世に推重すべきの人。



齒科醫士 矢口信太郎君

大阪市東區北濱五丁目

慶應三年五月を以て神戸に生る、君の家は時計商なり、年少にして基督教を信じ、明治十五年同志社に入り、同二十年卒業、此間に於て大に英語の素養を積めり、後千葉縣に赴き、第一高等中學に入り、更に大學豫備門に入りて、二ヶ年間理化學及地質學を研究せり。  
實兄某氏は東京にあり、君をハーバート大學に遊ばしめんとし、君亦其志あり、同志社の添書を得て之を懐にしたるも、惜い哉、豫て其所有地三十五六町歩を賣却して資金に充てんとしたる計畫が齟齬したる爲め、終に中止の餘義なきに至れり、

斯くて君は内地にありて基督教の傳道に従事し居たるが、二十六年ドクトル、ハロール、スレード氏米國より來るに會し、之が助手として醫務に従事すること三年、爰に始めて齒科醫たらんとするの志望を生じ、超へて三十年東京に於て齒科醫開業試験に及第、同年六月を以て横濱に開業、三十三年現在の場所に移轉以て今日に至れり。

君は言行一致の宗教的道徳家にして、能く後進を善導す、現に桑港に開業して成功を博しつゝある内海氏の如きも、長く君の家に寄寓して其指導を受けたる人なり。

君は専門外の嗜好としては、西洋音樂を愛しバイオリンの名手なり、謠曲も亦君の得意とするところなりと云ふ。



豫備陸軍二等軍醫  
從七位  
醫學得業士

### 眞柄佐一郎君

滋賀縣大津市松本町

明治十一年を以て新潟市に生る、二十八年新潟中學校を卒業し、三十三年十一月金澤第四高等校醫學部を卒業す。  
三十四年一年志願兵となり、翌三十五年十一月三等軍醫に任ぜらる、除隊後金澤病院に入り内科醫員たり、三十七年一月同病院を辞し、同年二月日露砲火を交ゆるや、君は召集せられて第二師團に入り、殊功を残して三十九年二月除隊、同時に二等軍醫となる。

同年三月公立大津病院に入り、内科副醫長となり、以て今日に及ぶ、君は學生時代より篤學勤勉の名を同窓間に馳せたる人なり、平生寡言にして

多く人と争はず、一見君子人の風あるも談遇ま其専門とするところに及べば、論議縱横一步も譲ることなし、以て其如何に學究的態度の眞摯にして且つ造詣の甚だ深きかを偲ぶべし、今日に至るも尙ほ研學を怠らず、想ふに其志すところを極めて遠大なるものあるべし、君の春秋尙ほ豊なることと相待つて、其前途大に有望なるを知るべきなり。

君は専門以外書畫に趣味を有し、業務の餘暇、筆端雲を生じ龍を躍らして徐かに會心の笑を湛ふるを以て最快事と爲す、又竹材に山水畫を彫刻して自ら樂しむ何れも技妙所に入る。

君事に當つて果斷、人に接するは快潤、敢て城府を設けず、且つ氣節を尙び信義を重んずる点は、實に紳士の好典型と謂ふべし。



齒科醫士 友井宗吉君

大阪市東區高麗橋一

明治十年十月を以て熊本城下に生る、恰も西南戦争の當時なり、君の家は世々細川家に臣たりしが、嚴父彌三治氏は西南役に際して賊軍に黨し、諸所に轉戦して負傷し、爲めに天壽を縮め、明治十七年に至りて終に永眠せり、君は乃はち七歳にして孤となり、親戚の保護を受けて小學に入り、二十七年之を卒業するや、一たび軍人を志望せしも短身にして視力弱きが爲めに之を果さず、去て醫學に志し、始め長崎醫學校に入り、後故ありて熊本春爾社醫學校に轉じ、傍ら諸先輩に就て斯道の實習を怠らざりしが、三十二年笈を負ふて東上、齒科の名手一井正典氏を擇んで之に師事し、日

夜其訓練を受くる事三年、更に師を扶けて實地の經驗を積むこと四年、乃はち三十九年に至り成規の試験に及第して、籍を齒科醫に置くことゝなれり。

恩師一井氏は元九州相良侯の老臣にして、米國に留學すること十五年の久しきに及び、而も當時世間の注目を惹くこと少なかりし齒科醫を專修せるを以て、歸來斯界の泰斗として大に名聲を博したる人なり、而して一たび君を引見して其堅志抜くべからざるを見るや、喜んで其入門を許し特に薰陶た努むる事、殆んど其子の如くせり、君亦其恩恵に感激し、粉骨碎身して之に仕へたる而已ならず、既に一家を爲したる今日と雖、一日も師の事を忘れずと云ふ。

君資性沈着にして寡言、而も情誼に篤し其恩師に對する態度に見るも以て其人格を想察し得べきなり、嗜好は馬術にあり、會々寸暇を得て遠乗りを試むるは、最も其快とするところなりといふ、今や技能老熟して斯界屈指の名家たり、來つて診を請ふもの門前市をなしつゝあり。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫學得業士

阪井龜定君

和歌山縣和歌山市寄合町

君は紀伊の人なり、若冠にして醫學に志し小、中學校の科程を卒へて、後京都醫學專門學校に學び、其校の出身なり、君業を卒るや再び入りて外科を池田醫學博士に就きて研鑽し、耳鼻咽喉科研究の爲めに京都醫科大學に入りて、和辻博士に師事して研究する年あり、後ち來つて現地に門戸を張れり、君資性堅緻にして、特に細密の小手術に妙を得、其耳鼻科に志したは先天的好尙に出でたるものなりと傳へらる。

君性穩健にして、其遣り口は何處までも堅緻にして、派手ならざるも既に君は本國醫界濟々多士の國特に一色彩を有するものと云ふべし。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫士 萩野紀一郎君

大阪府泉南郡岸和田町

君が先考は美作の人なり、君は岸和田町に生る、幼にして穎悟讀書を好む、長ずるに及んで家祖の業を襲んとして、笈を東京に負ふて、東京醫學專門學校濟生學舎に學び、業就るの後、歸來一番現地に業を啓く、君が業務は其勵精と努力との功によりて日に隆興し、家門益々榮ゆ。

資性温良にして漫りに人と争ふが如きことなく、君子人の風あるも、一たび談論の人となれば、又た風發當るべからざるものあり、勤勉にして克己の情に富み事に當りて殆んど倦むことなく、精力の旺盛を以て知らる、君は専ら内科、婦人科の術に長じ既に泉南郡中の花形を以て目せられ、其名遠近に馳す、又た書畫骨董の趣味に深く且つ鑑識の明を有す。

君は往訪の記者に  
對し謙讓以つて小  
照の交付を許さざ  
りき

醫學得業士

村田藤太郎君

京都府相樂郡祝園村

君は文久三年十月を以て生る、累世醫を以て業となす、君幼にして土師小學校を卒へ、後京都に出で、京都青莪塾に入りて星漢の學を修む、明治十四年獨乙學校に入り進んで京都醫學學校に醫學の研鑽をなし、二十二年四月全科を卒業す。

君は謹直にして阿世の徒に非らず、氣骨稜々義氣に富む、君又た漢文學の造詣も淺からず、詩賦に文章に其長を見る、清新唱すべきものあり、君嘗つて九州に遊ぶや、耶馬溪を過ぎ一詩を賦して曰く。

純石爲峰凡幾程。

穿窓墜道々分明。

今朝識誰興遊趣。

耶馬溪頭衝雨行。



豫備陸軍三等軍醫  
正八位勳六等  
醫學得業士

濱地藤太郎君

大阪市東區平野町

君は肥前唐津の人、明治十六年九月を以て生る、君幼にして穎悟を以て知らる、長じて東京神田中學校に入りて其業を卒へ明治三十三年九月進んで金澤醫學專門學校に入り、三十七年十一月其全科を卒業し、同年十二月一年志願兵となりて歩兵第二十五聯隊に入る、翌年六月陸軍三等軍醫に任せらる、其年八月第九師團第一野戰病院附として戰地に赴任す、三十九年四月功を以て勳六等を賜る是れより先き戰收まるや、君は歸りて帝國醫科大學京都醫科大學に助手として、耳鼻咽喉科の研鑽をなす、當時博士和辻門下の俊才を以て聲名あり、君が特に綿密なる小手術に運刀の巧妙なる快

腕を揮ふところ、眞に天品と云ふべし、四十一年三月石川縣私立七尾病院耳鼻咽喉科醫長として厚聘せられて其任に赴く居ること三年、四十三年二月其職を辞し、四十三年三月再び京都醫科大學に入りて和辻博士の指導下に學究の人とはなりぬ、四十三年七月來つて大阪に業を開く、君は其特長たる耳鼻咽喉科の治療に従事するや、勤勉眞摯にして、熱心且つ親切に治術を講じて餘念なく、其患者に對する診察振りなどは得も言はれぬ風情あり、門を開いて僅かに數月なるも、既に門前診を請ふもの續々接するに至る、是れ蓋し君の人格と手腕との致すところなり。

君は性温良にして、人に接して謙讓を吝まず、其平生たる温潤玉の如きものあり、而も中に一種犯すべからざる威嚴あり、社交に巧にして談論に長じ語尾甚だ明晰なり、其專攻學科に於ても斯界の第一流と稱せらるゝも之れに對して毫も矜色なく、先進は先進として敬し、一方益々其の蘊蓄を窮めずんば已まざらんとするの風ありと云ふ、君の如きは當に以て眞正の學究的人にして、寧ろ學壇の人と稱すべきか。

明治四十四年二月二十日印刷  
明治四十四年二月廿五日發行

關西杏林名家集第二輯

正價 金拾圓

編輯者兼  
發行者  
遠山 茂

大阪市南區難波河原町二丁目千四百六十八番地

印刷者  
高井保太郎

大阪市北區結屋町二十番地二號

發行所  
衛生新聞社

大阪市南區難波河原町二丁目千四百六十八番地

印刷所  
大阪市結屋町二十番地二號

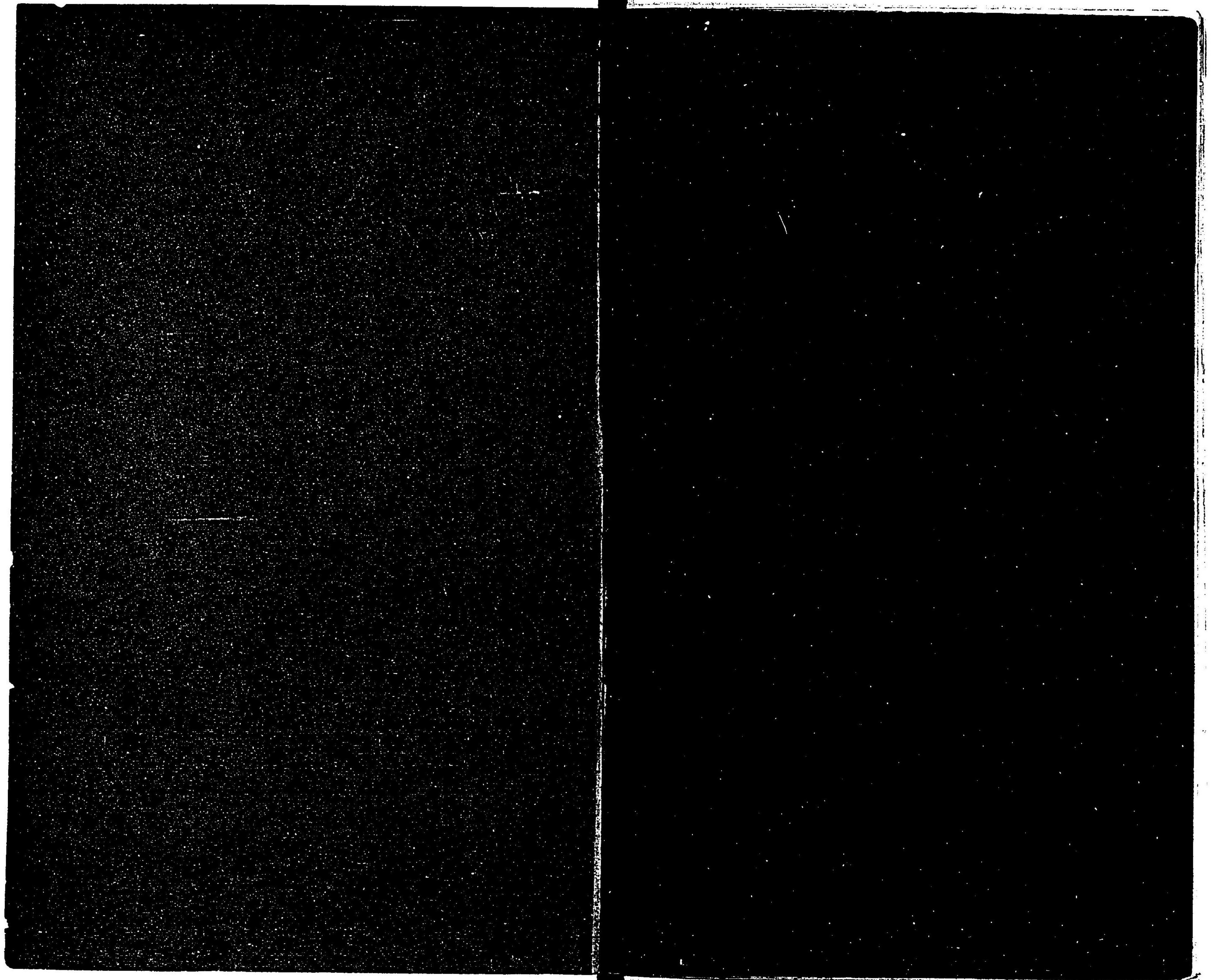
成文社印刷所

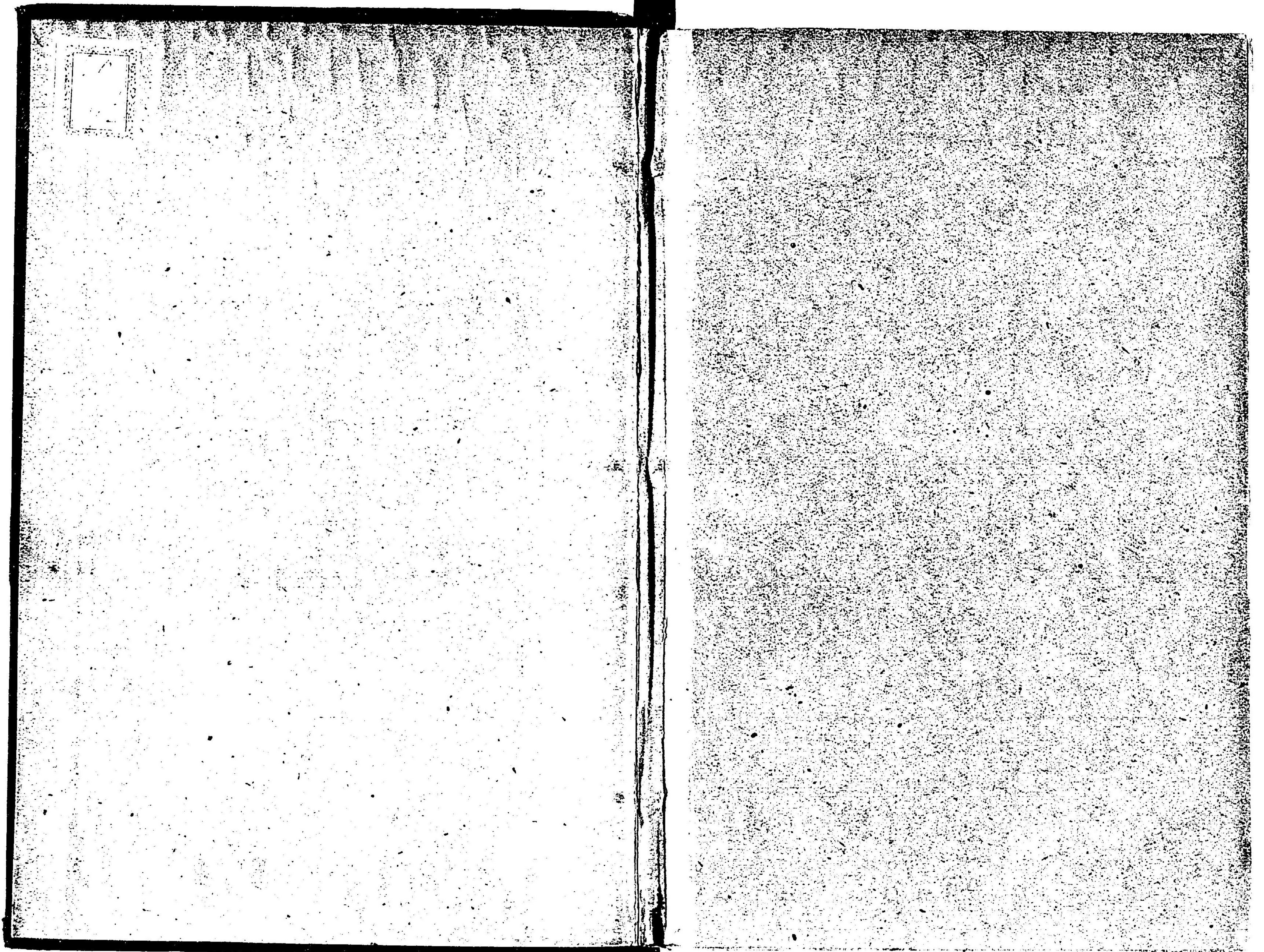
不許  
複製

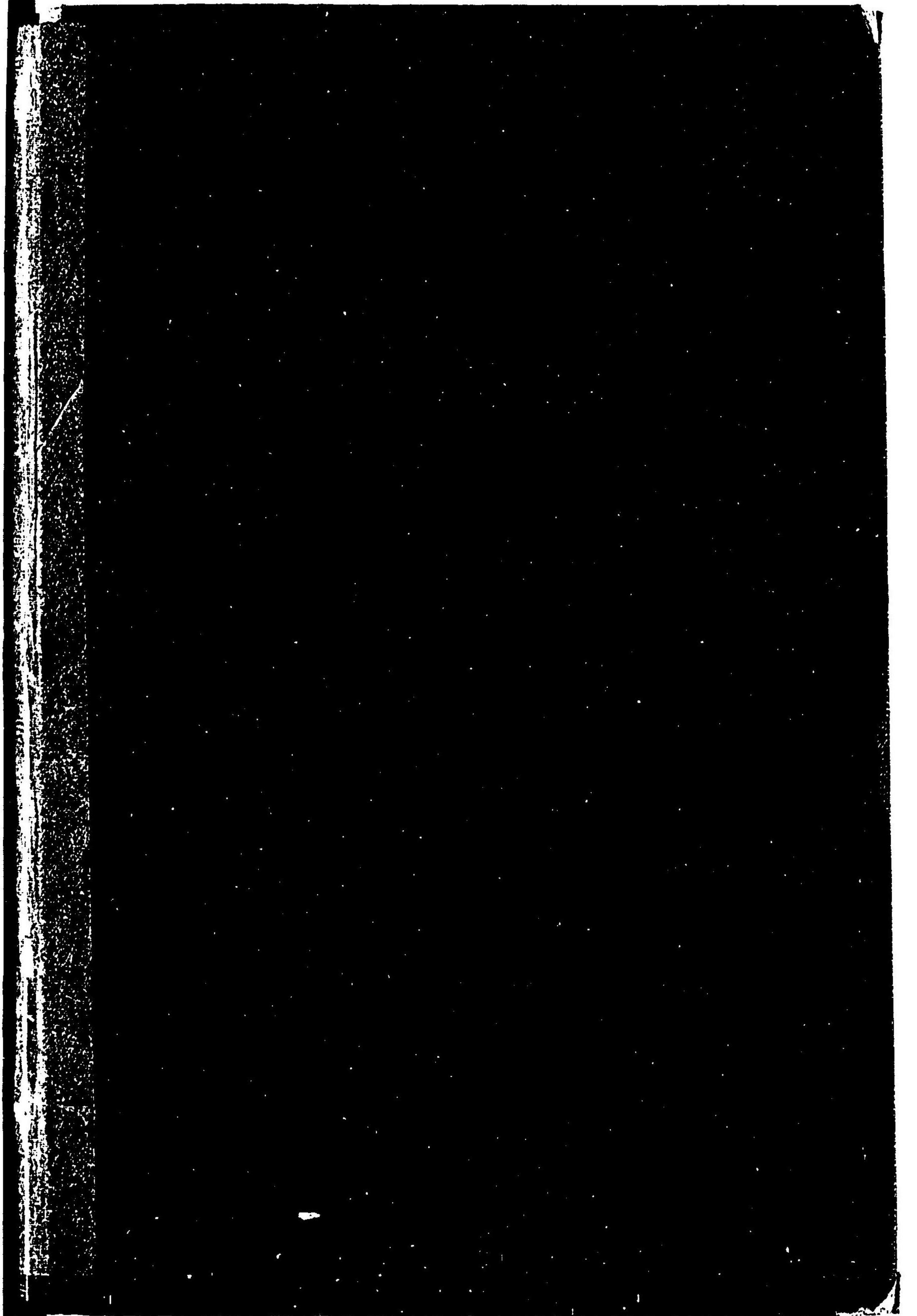


60  
294

53







60  
274

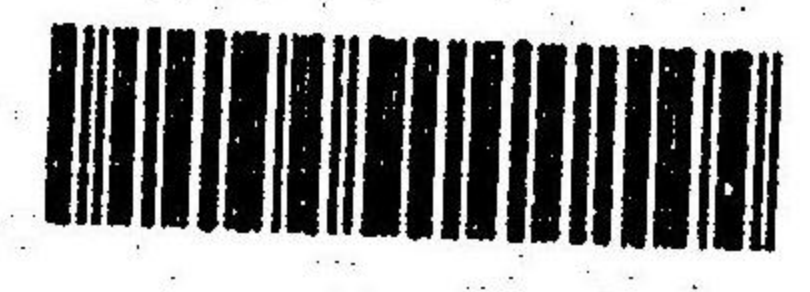
004189-002-1

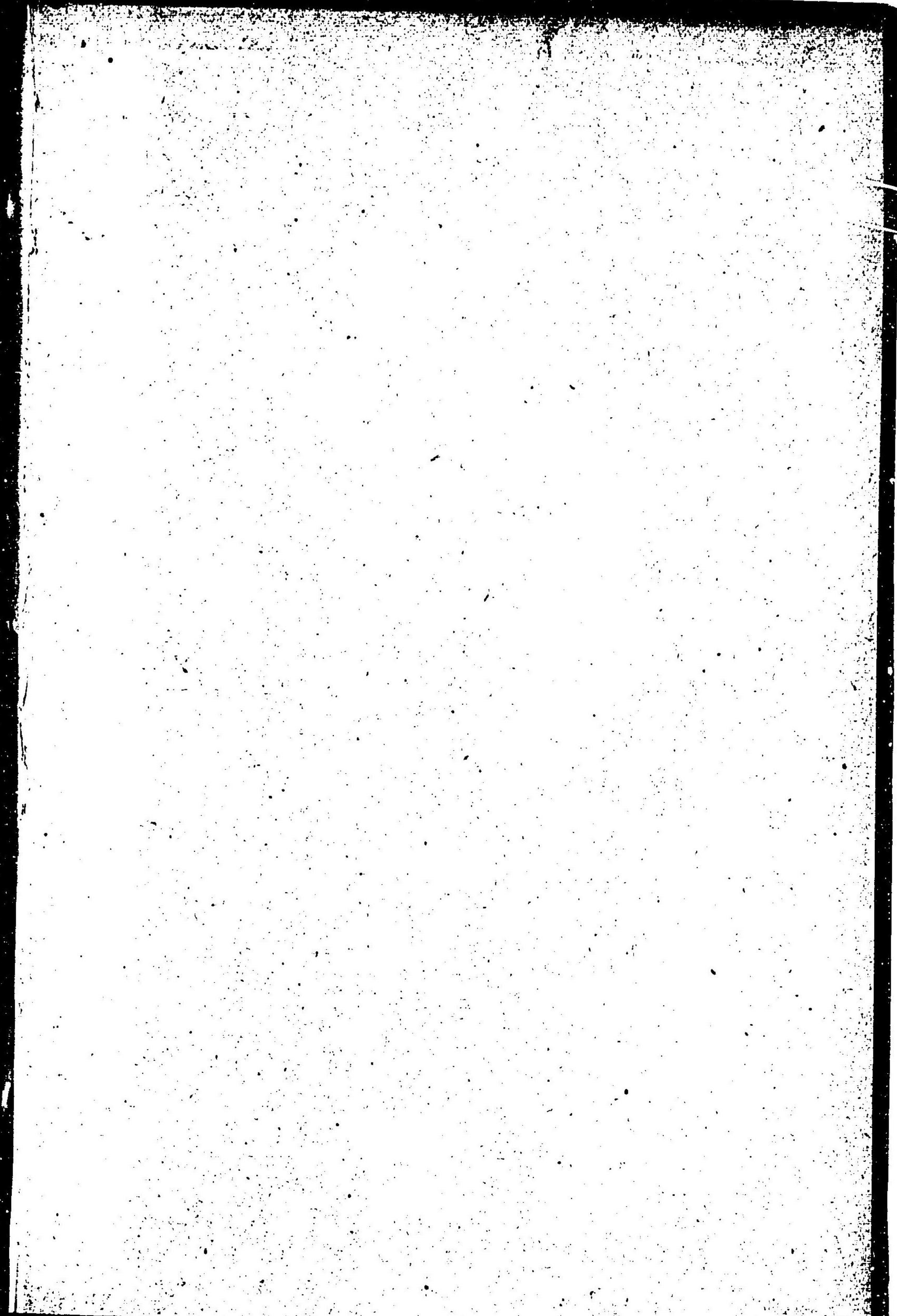
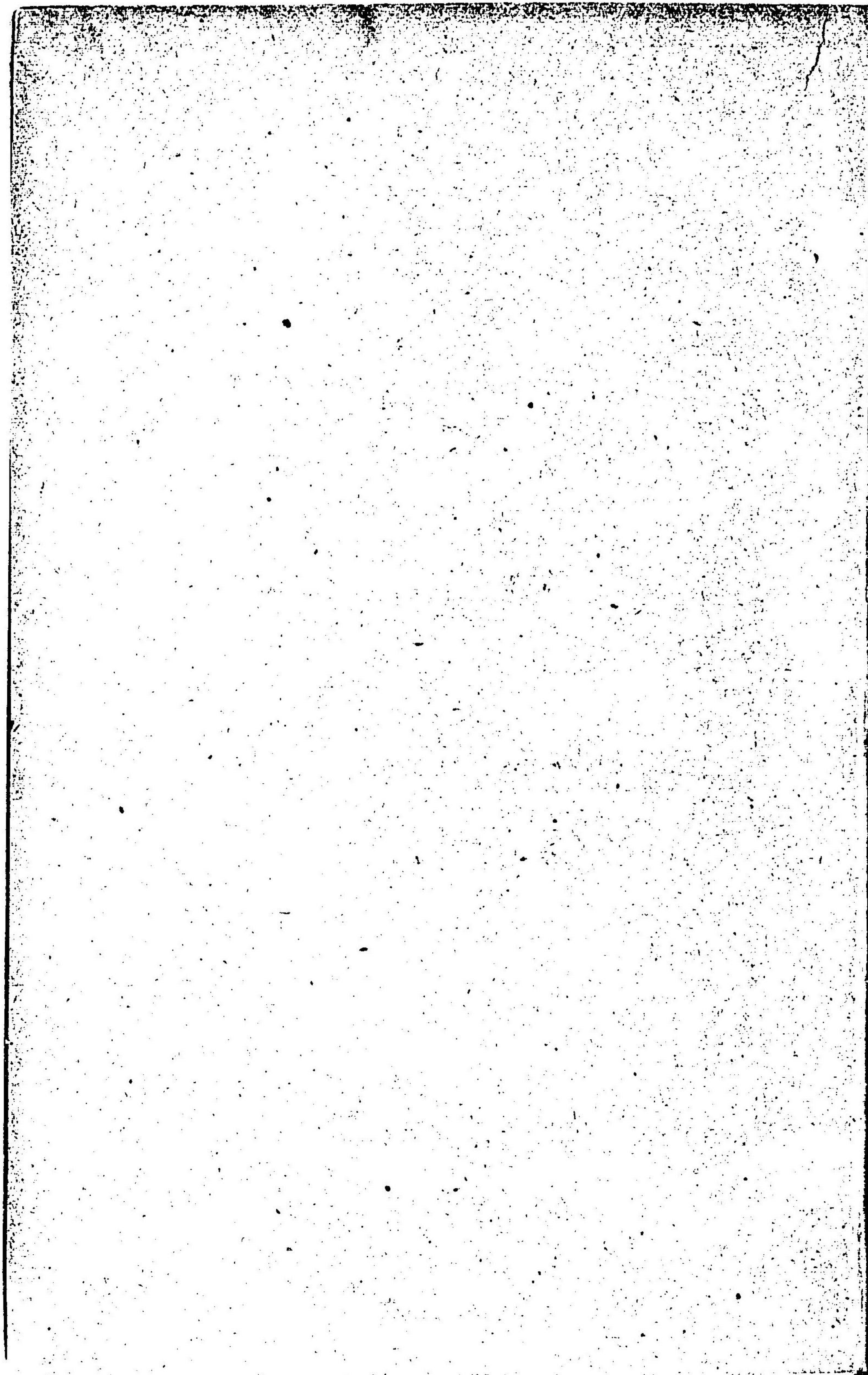
60-274

関西杏林名家集

M42, 44

ACE-0557





|     |
|-----|
| 60  |
| 274 |